

平成3年度発掘調査概報



茨木市教育委員会

序 文

茨木市は、大阪府の北東部にひろがる三島平野のほぼ中央部に位置しており、大都市大阪と京都の中間に位置しているため、古代から現代に至るまで北摂地域の中核的都市として発展してきました。

このため古くから文化遺産に恵まれており、市内には弥生時代の拠点的集落である東奈良遺跡をはじめとする全国的に著名な遺跡や古墳が数多く存在しています。

しかし、近年にみる大規模開発は、今まで地下に眠っていた文化財の散逸を招くことになりました。そのため本市教育委員会では、市内において毎年発掘調査を実施してまいりました。

本年度は中河原遺跡・東奈良遺跡・宿久庄遺跡などで発掘調査を実施しました。中河原遺跡・東奈良遺跡では弥生時代の造構・遺物の検出があり、また、宿久庄遺跡では中世の掘立柱建物が多数検出され、いずれも本市の歴史を探るうえで、重要な資料を得ることができました。本書の刊行が、地域の歴史を理解するのにお役にたてれば幸いです。

未筆ながら、発掘調査に深い御理解と惜しみない御協力をいただきました関係各位の皆様に厚く感謝いたします。

平成 4 年 3 月 31 日

茨木市教育委員会
教育長 村山和一

例　　言

1. 本書は、茨木市教育委員会が主体となり平成2・3年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告である。
2. 本年度の調査は、中河原遺跡・東奈良遺跡・宿久庄遺跡の3遺跡について実施した。各遺跡の調査期間及び調査担当者は下記のとおりである。

中河原遺跡（NG・90-1）

平成2年10月1日～11月15日・濱野俊一

東奈良遺跡（HN H-4-E・F地区）

平成3年1月10日～1月27日・奥井哲秀、中東正之

宿久庄遺跡（SH・91-1）

平成3年5月10日～7月1日・濱野俊一、中東正之

3. 現地調査及び内業整理にあたっては調査補助員として下記の参加協力を得た。

藤田昌宏	吉田和美	早川博子
大戸井浩一朗	耕田さゆり	桑原紀子
藤田明弘	多田みちる	大戸井和江
林和博	森木芳子	西坂泰子
原口武	峯松皓代	
高瀬隆治	田中良子	

4. 現地調査及び内業整理にあたって、免山篤氏（茨木市文化財保護委員）から御指導・御教示を賜った。また、森岡秀人（岸屋市教育委員会）・森田克行・橋本久和（高槻市立埋蔵文化財センター）・橋爪康至（尼崎市立田能資料館）・古川久雄（芦ノ芽グループ）の各氏より助言をいただいた。原因者の（㈱日本通運茨木支社・グンゼ㈱そして三貴建設工業㈱・㈱島田組にも種々協力を得た。
5. 本書を作成するにあたっては出土遺物実測を濱野・西坂、各種図面作成は濱野・西坂、遺物写真は奥井・中東・濱野が分担した。全体の編集は濱野・奥井が担当し、本文執筆はそれぞれ濱野・中東・奥井が分担して行い、文末に明記した。
6. 東奈良遺跡の地区割りは東奈良遺跡調査会が、昭和47年に設定したものを使用している。その他の遺跡は調査にあわせて任意に設定した。また、標高はT・P（東京湾標準高）を使用している。

本文目次

序文

例言

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
旧石器時代	1
縄文時代	2
弥生時代	2
古墳時代	3
歴史・中世・近世時代	4

第2章 中河原遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過	8
第2節 検出遺構と遺物	9
第3節 まとめ	19

第3章 東奈良遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過	23
第2節 検出遺構と遺物	25
第3節 まとめ	35

第4章 宿久庄遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過	36
第2節 検出遺構と遺物	38
第3節 まとめ	52

挿 図 目 次

第1図 茨木市位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	7
第3図 中河原遺跡発掘調査地位置図	8
第4図 中河原遺跡第1・2及び第3遺構平面図（折込み）	11・12
第5図 中河原遺跡第3遺構面平面図（方形周溝墓状遺構付近）	14
第6図 方形周溝墓状遺構-1・2周溝（SD-07）断面図	15
第7図 方形周溝墓状遺構-1・2出土土器実測図	20
第8図 方形周溝墓状遺構-1・2及び落ち込み（SX-02）出土土器実測図	21
第9図 方形周溝墓状遺構-2、落ち込み出土石器 及びSK-02、SD-01包含層出土土器実測図(3)	22
第10図 東奈良遺跡地区割り及び調査地域図	24
第11図 土壌-1上層土器出土状況実測図（1）	26
第12図 東奈良遺跡遺構平面図（折込み）	27・28
第13図 土壌-1下層土器出土状況実測図（2）	29
第14図 大溝出土土器実測図	33
第15図 土壌-1・2、包含層出土土器実測図	34
第16図 宿久庄遺跡発掘調査地位置図	36
第17図 宿久庄遺跡第1遺構面平面図（折込み）	39・40
第18図 宿久庄遺跡第2遺構面平面図（折込み）	45・46
第19図 宿久庄遺跡第2遺構面溝（SD-01）土器出土状況図 及び同土層断面図（折込み）	47・48
第20図 宿久庄遺跡出土土器実測図	51

図 版 目 次

- 図版 1 (上) 中河原遺跡 第1遺構面 (S D-01~03) 検出状況
(下) 中河原遺跡 第2遺構面 土壌群検出状況
- 図版 2 (上) 中河原遺跡 第3遺構面 方形周溝状遺構-1・2
(下) 中河原遺跡 方形周溝状遺構-1・2 (S D-07) セクション
- 図版 3 (上) 中河原遺跡 方形周溝状遺構-1
(下) 中河原遺跡 方形周溝状遺構-2
- 図版 4 中河原遺跡 (N G 90-1) 出土土器 (1)
- 図版 5 中河原遺跡 (N G 90-1) 出土土器 (2)
- 図版 6 (上) 東奈良遺跡調査区全景
(下) 東奈良遺跡大溝中央セクション
- 図版 7 (上) 東奈良遺跡土壤-1上層土器検出状況
(下) 東奈良遺跡土壤-1下層土器検出状況
- 図版 8 (上) 東奈良遺跡土壤-1上層土器検出状況
(下) 東奈良遺跡土壤-1下層土器検出状況
- 図版 9 東奈良遺跡 (HN-4-E・F) 出土土器 (1)
- 図版10 東奈良遺跡 (HN-4-E・F) 出土土器 (2)
- 図版11 (上) 宿久庄遺跡第1遺構面全景
(下) 宿久庄遺跡掘立柱建物-6
- 図版12 (上) 宿久庄遺跡掘立柱建物-4
(下) 宿久庄遺跡掘立柱建物-4 柱穴(S P-14, S P-17) 出土土器状況
- 図版13 (上) 宿久庄遺跡掘立柱建物-3
(下) 宿久庄遺跡掘立柱建物-3 柱穴(S P-123)瓦器椀出土状況
- 図版14 (上) 宿久庄遺跡掘立柱建物-4 棚列-1 掘立柱建物-5 棚列-2全景
(下) 宿久庄遺跡掘立柱建物-5 棚列-2 柱穴内(S P-46, S P-42) 積石検出状況
- 図版15 (上) 宿久庄遺跡掘立柱建物-1
(下) 宿久庄遺跡掘立柱建物-1 柱穴 (S P-190)瓦器椀出土状況
- 図版16 (上) 宿久庄遺跡第2遺構面全景
(下) 宿久庄遺跡第2遺構面全景 掘立柱建物
- 図版17 (上) 宿久庄遺跡第2遺構面全景
(下) 宿久庄遺跡 構 (S D-01) 須恵器甕出土状況
- 図版18 (上) 宿久庄遺跡 第2遺構面線出土状況
(下) 宿久庄遺跡 第2遺構面环身出土状況
- 図版19 (上) 宿久庄遺跡 第2遺構面掘立柱建物土師器甕出土状況
(下) 宿久庄遺跡 第2遺構面短颈甕出土状況
- 図版20 宿久庄遺跡 (S H 91-1) 出土土器 (1)
- 図版21 宿久庄遺跡 (S H 91-1) 出土土器 (2)

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

大阪府の北東部に位置する茨木市は、南北17.3km、東西8.6kmと、南北に長く、東西に短い市域を形成している。地理的特徴としては、茨木市域の北半部は標高300m前後の丹波層群と呼ばれる秩父古生層系の岩石により構成される北摂山地、及び北摂山地から派生する丘陵部からなり、西には標高50~100m前後の前期洪積層の隆起地形の一つである千里丘陵が位置する。東と南は安威川・淀川などの主要河川によって形成された冲積層の三島平野が広がる。また、茨木市内には安威川・佐保川・勝尾寺川・元茨木川（現在廃川）などの主要河川があり、北から南へ三島平野を流れ、淀川に合流している。このように東奈良遺跡をはじめとする茨木市の遺跡は、千里丘陵の東側を占め淀川中・下流域北岸に広がる北摂地域の西部に属している。



第1図 茨木市位置図

第2節 歴史的環境

茨木市の位置する北摂地域は人々が早くから住み始めていることが近年の調査で明らかになりつつある。以下近年の調査を踏まえ茨木市とその周辺の遺跡について最近の発掘調査による成果を踏まえながら概観してみるとする。

旧石器時代 市域で明らかにこの時代の資料が得られているのは、山麓部の太田、耳原、安威、郡遺跡等で表面採集や後世の遺物包含層からナイフ形石器・有舌尖頭器が単独又は少数発見されている。また、最近では東奈良遺跡においてもナイフ形石器が出土している。

周辺では、北部の高槻市郡家今城遺跡において礫群や石器群が検出されており、塙原遺跡・津之江南遺跡・郡家川西遺跡などからもナイフ形石器や有舌尖頭器が検出されているよう、高槻市周辺に集中している。また、南部の吹田市吉志部遺跡からもナイフ形石器・有舌尖頭器・搔器が検出されており、垂水遺跡ではナイフ形石器、石核等が確認されている。そして箕面市粟生間谷（奥地区）においても有舌尖頭器が発見されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡は近年まで市域及び周辺でも少なかったが、最近の開発に伴う発掘調査により縄文時代の遺跡が北摂地方でも増加している。市内の縄文時代の遺跡としては安威川と佐保川に挟まれた舌状台地に立地している耳原遺跡がある。この遺跡からは晩期（滋賀里Ⅲ式・船橋式・長原式）の壘（深鉢）棺墓が16基そして石鎌が50点以上検出されている。そして安威川右岸の沖積地に立地している牟礼遺跡からは自然流路・井堰・水田などが検出され自然流路から若干の晩期（滋賀里Ⅲ式～Ⅳ式・船橋式）の土器が出土している。他に山麓部の初田遺跡や西福井遺跡・太田遺跡でも縄文土器が出土しており、沖積地に立地している東奈良遺跡から前期末（大歳山式）の爪形文（C字）土器や晩期後半（大洞AないしA式に併行）の浮線文土器、晩期後半の突帯文土器が出土している。また、石棒や石刀が東奈良遺跡や郡遺跡から出土している。

周辺では、東隣の高槻市の宮田遺跡にて後期および晩期末の落ち込みからそれぞれ一括資料が検出されている。他に安満・郡家川西・塚原・塚穴・天神山遺跡、そして淀川河床に立地している柱本・大塚遺跡からも早期から晩期にかけての縄文土器が出土している。また、最近の発掘調査で芥川遺跡から後期（北白川上層式でも古い時期を中心）の土壙や土器棺が検出された。西に目をむけると吹田市吉志部遺跡においては晩期後半の突帯文土器が落込みから出土し、箕面市には学史的にも著名な瀬川遺跡があつて前期（北白川下層式）と後期（元住吉山・宮滝式）の土器が出土している。また、新稻・如意谷・白鳥の各遺跡でも縄文土器や石器が発見されている。

弥生時代 弥生時代になると、北部九州から瀬戸内海を東進してきた初期水稻農耕をはじめとする弥生文化は大阪湾から淀川を北上し茨木市域にも急速に広がっていく。大阪湾から淀川そして安威川を遡上してきた弥生文化は最初、沖積地の東奈良・目垣遺跡に集落を形成する。その後、同河川の左右両岸に位置する耳原・郡遺跡にも集落を形成する。また中期以降には遺跡数が急激に増加し、市内の主要河川である安威川・佐保川・勝尾寺川の両岸、あるいは丘陵部や山間部まで広がり拠点的集落である東奈良遺跡をはじめとして中河原・太田・中条小学校・溝昨・倍賀遺跡⁽¹⁾、そして高地性集落である石堂ヶ丘遺跡など⁽²⁾が出現する。

周辺地域では北部の高槻市に東奈良遺跡と同じく北摂地域の拠点的集落と考えられている安満遺跡がある。旧桧尾川左岸の扇状地に立地し、前期から後期まで断続的に集落を形成している。また、平野部には安満遺跡以外に郡家川西・芥川遺跡がある。最近の発掘調査では芥川遺跡から前期の土壙墓群や後期の多角形住居跡などが検出されており、特に多角形住居跡のひとつからは中国製の方格規矩四獸鏡が出土している。丘陵上には天神山遺跡があり中期の集落と銅鐸が出土している。また、北摂山地の尾根上には高地性集落である古曾部・紅葉山・萩之庄・芝谷遺跡などが立地する。

西南部の吹田市域の千里丘陵南端には中期から後期にかけて存続する高地性集落である垂水遺跡があり、その眼下の低地部には垂水南遺跡がある。後期になると低地部の高川左岸

に蔵人遺跡が、糸田川流域に五反島遺跡が出現する。また、千里丘陵の東端の山田別所からは外縁付紐式銅鐸が単独出土している。

北西部の箕面市では、弥生時代の遺跡が比較的少ないが、箕面川左岸の池ノ内遺跡から中期後半の土器が整地層からまとまって出土している。また、突線紐式銅鐸が如意谷遺跡から単独出土している。

古墳時代 古墳時代に入ると山麓部に前期古墳として著名な紫金山古墳や將軍山古墳が相次いで築造される。両古墳とも全長 100m 程の前方後円墳で、後円部中央に竪穴式石室がある。竪穴式石室には U 字形の粘土棺床をそなえ割竹形木棺があったと推定されている。紫金山古墳では石室内から 12 面の鏡ほか貝製の鏡形石・車輪石・筒形銅器など多種多様な副葬品が出土している。將軍山古墳では、石室内が早くから盗掘にあって副葬品の出土は少なく勾玉・小玉・銅鏡・鉄鏡などが残っていたのみである。また、竪穴式石室の石室用材は、和歌山県の紀ノ川流域から運ばれたと考えられる結晶片岩をいる。

その後、前期末には安威 0 号墳及び安威 1 号墳が築造される。安威 0 号墳は直径約 10m の円墳で、墳頂部には割竹型木棺を入れた粘土櫛が 2 基検出されている。安威 1 号墳は全長約 45m の前方後円墳で、後円部の墳頂部に東西に主軸をもつ粘土櫛が 2 基検出されている。中期になると太田茶臼山古墳（現、繼体天皇陵）が築造される。全長 226m の前方後円墳で、周囲には陪冢も 5 カ所存在する。

また、北に位置する太田石山古墳は、最近の発掘調査によると、直径 28m 前後の円墳（前方後円墳の可能性もある）で 5 世紀前半から中頃にかけての築造と推定されており、太田茶臼山古墳より先行して築造された可能性の高いことが判明した。また、中期の墳丘を削平された埋没古墳が、郡遺跡・駅前遺跡において検出されている。

後期になると、横穴式石室を主体とする古墳が、安威川・佐保川・勝尾寺川流域の山麓部に築造される。このうち最も早く横穴式石室を導入したと推定される古墳は青松塚古墳である。この古墳は直径約 20m の円墳で横穴式石室の玄室プランが正方形に近く、玄室と羨道の境は二段の石段となっている。また、副葬品も画文帶神獸鏡をはじめ馬具や切子玉などをもっている。さらに、墳丘の一部では円筒埴輪や家形・人物などの形象埴輪片が出土しており、畿内への横穴式石室導入期（5 世紀末から 6 世紀初め）の古墳と推定される。

続いて、南塚古墳と海北塚古墳が築造される。南塚古墳は前方後円墳で後円部中央に横穴式石室があり、玄室内に 2 基の凝灰岩製組合式石棺を安置している。海北塚古墳は横穴式石室を内蔵する円墳で石室を構成する石材は巨大な花崗岩の河原石で玄室内に緑泥片岩製箱式石棺のみられることが特徴である。

その後、新屋古墳群・安威古墳群・長ヶ淵古墳群などの群集墳や、耳原古墳などの大型単独墳が築造される。特に耳原古墳は直径約 23m 前後の円墳で、中央に巨大な横穴式石室がある。石室構造は玄室奥壁が花崗岩の 1 枚石、側壁は 3 段積みで玄室内には二つの石棺があり、奥棺は家形組合せ式石棺、前棺は家形剝抜式石棺である。

後期末から終末期にかけては、初田1・2号墳・上寺山古墳・阿武山古墳が築造される。市内の後期古墳の特徴としては、横穴式石室導入期の古墳と推定される青松塚古墳から終末期の古墳として著名な阿武山古墳まで古墳が連綿と築造されている。また、大形単独墳が多く群集墳も古墳自体の規模が大きいことと、副葬品の内容も比較的豊かな点が指摘できる。

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から存続する東奈良・郡・倍賀の各遺跡を中心に、中条小学校・太田・宿久庄などの遺跡が知られている。

周辺地域では、東部の高槻市域で前期から弁天山A1号墳・B1号墳・C1号墳が順次築かれ、続いて郡家車塚古墳・前塚古墳が築造される。このなかで4世紀末の郡家車塚古墳まではいずれも前方後円墳であるが5世紀前半の前塚古墳は全長94mの帆立貝式古墳であるが、凝灰岩製の長持型石棺が出土している。

中期から後期にかけては前方後円墳の墓谷2号墳・墓谷4号墳が築かれ、6世紀段階になると昼神車塚古墳・中将塚古墳そして郡家今城塚古墳が築造される。また群集墳である塚原古墳群・塚脇古墳群・慈願寺古墳群・梶原古墳群などが形成され、集落遺跡も安満遺跡・大藏司遺跡・芥川遺跡など前時代から引き続き集落が営まれる。特に土室の新池一帯には5世紀中頃から6世紀中頃にかけての18基の埴輪窯をはじめ、大型埴輪工房が3棟が検出され、あわせて埴輪工人の集落もみつかっている。

南西部の吹田市域では前期古墳と推定されている垂水西原古墳以外前期及び中期の古墳はみあたらず後期古墳としては出口古墳や吉志部古墳そして新芦屋古墳などがある。吹田市域には大形前方後円墳や群集墳は形成されなかったが後期には千里丘陵南東部の広い範囲に千里古窯跡群と呼ばれる大規模な須恵器窯群が形成される。古墳時代の集落遺跡としては垂水南遺跡や藏人遺跡などがある。

北西部の箕面市でも前期及び中期の古墳はみあたらず後期の大形単独墳が地域おきに分布している。中尾塚・桜塚・大谷塚・稻荷社古墳などがあり、横穴式石室を主体とする。集落遺跡としては前期（布留式）の堅穴住居跡が検出された池ノ内遺跡や町田遺跡などがある。

歴史・中世・近世時代 茨木市域は律令時代にはいると嶋下郡に属するようになる。嶋下郡は新野・宿人（久）・安威・穂積の4郷からなり、嶋下郡衙は旧山陽道（西国街道）沿いの郡付近にあったと推定されている。近年の郡遺跡の発掘調査では奈良時代から平安時代にかけての建物跡が検出されているが郡衙跡と考えられる遺構・遺物は未だ検出されていない。

しかし近隣の高槻市では、同市郡家で嶋上郡衙跡が発見されている。奈良時代の建物跡や「上郡」と墨書きされた土師器が井戸から検出されており、今後郡遺跡の発掘調査においても同様な嶋下郡衙跡が発見される可能性が高いと思われる。

古代寺院としては飛鳥時代末期から奈良時代にかけて創建された氏族寺院の穂積・太田

・三宅廃寺がある。特に太田廃寺からは、塔婆心礎及び舍利容器一具、そして複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。

また安威の大鐵冠山では凝灰岩製の石櫻から三彩釉有蓋壺の藏骨器が発見されている。平安時代前期には忍頂寺・總持寺が創建されている。

茨木は古代より藤原氏の勢力の強い土地で、市内の多くは藤原氏の荘園であった。しかし中世にはいると、前時代に勢力のあった摂関家の藤原氏の力が衰えて、荘園領主の氏神・氏寺である春日大社・興福寺に移り、両寺社の荘園支配が室町期の15世紀半ばまで続いている。市内で検出された中世集落としては宿久庄遺跡・郡遺跡・東奈良遺跡などがあり、堀立柱建物跡や井戸が検出されている。最近の発掘調査では、新たに茨木川左岸の玉櫛遺跡から平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけての集落と水田が検出されている。同時に当時使用していた瓦器・土師器・東播系須恵器・白磁・青磁などの碗・皿・捏鉢など遺物が出土している。

中世の集落に伴う墓地としてはクルス山・伏原中世墓地がある。また、中世から近世初めにかけて茨木城をはじめとして太田城・福井城などの平城や安威砦・佐保砦などが築造される。

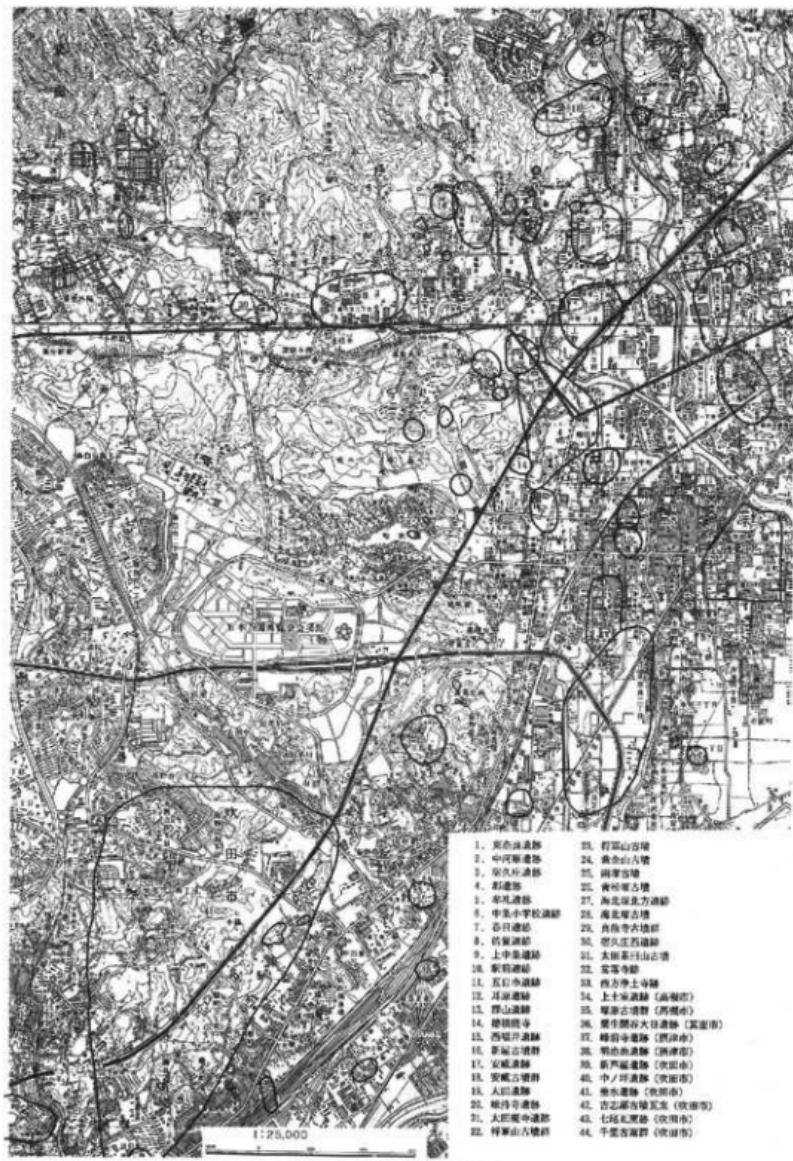
近隣地域においても、高槻市の宮田遺跡・上牧遺跡・上田部遺跡において堀立柱建物・井戸・墓（屋敷墓）などで構成された中世集落が検出されている。また、箕面市の如意谷遺跡においても堀立柱建物や井戸などが検出されている。吹田市の都呂須遺跡でも、溝から瓦器などが多数出土しており中世集落の一端が検出されている。
(濱野)

<註1> 郡遺跡は、近年まで弥生時代中期前半に集落が形成されたと考えられてきたが、平成2年度の（仮称）茨木市立中央図書館（畑田地区）建設に伴う発掘調査において、F-4区の包含層から弥生時代前期後半の広口壺が検出されている。この広口壺は頸部及び体部上半に多条ヘラ描沈線文を施し、摂津の様式編年におけるI-3ないしI-4の小様式に比定しうる。

<註2> 平成3年度の倍賀遺跡発掘調査（住友セメント内2次調査）において、弥生時代中期前半から中頃にかけての方形周溝墓を検出している。また、調査区の外側まで包含層が続いていることも確認され、倍賀遺跡が郡遺跡の畑田地区と連続していることが確認された。

参考文献

- 1 茨木市史
- 2 吹田市史・第1巻、第8巻別編
- 3 高槻市史・第1巻本編I、第6巻考古編
- 4 箕面市史・第1巻
- 5 東奈良遺跡調査会『東奈良 発掘調査概報I』1979年
- 6 東奈良遺跡調査会『東奈良 発掘調査概報II』1981年
- 7 茨木市教育委員会『昭和60年度～平成2年度発掘調査概報I・II』
- 8 茨木市教育委員会『わがまち茨木一城郭編・古墳編一』
- 9 茨木市教育委員会『茨木の歴史と文化遺産』1986年
- 10 茨木市教育委員会『茨木の史跡』1983年
- 11 大阪府教育委員会『岬上郡衙跡発掘調査概要』1971年
- 12 大阪府教育委員会『東奈良遺跡発掘調査概要I・II』1976年・1989年
- 13 大阪府教育委員会『玉櫛遺跡現地説明会資料』1991年
- 14 野上丈助『摂津の古墳』1969年
- 15 高槻市教育委員会『岬上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要I～VI』
- 16 高槻市教育委員会『高槻市文化財年報、昭和61～平成元年度』
- 17 高槻市教育委員会『芥川遺跡現地説明会資料』1991年
- 18 吹田市教育委員会『埋蔵文化財緊急発掘調査概報・昭和55年度～平成2年度』
- 19 吹田市教育委員会『文化財紀要2』1989年
- 20 如意谷遺跡調査団『如意谷遺跡』1982年
- 21 寺沢薰・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年（近畿編II）』
森田克行「摂津地域」



第2図 周辺遺跡分布図

第2章 中河原遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1 所在地 大阪府茨木市上郡1丁目

2 調査面積 250 m²

3 調査原因 日通茨木流通センター内倉庫建設

4 中河原遺跡の既往の調査

中河原遺跡は、名神高速道路茨木インターチェンジ北側の上郡1丁目から郡5丁目にかけて広がる遺跡で、茨木川右岸に位置している。中河原遺跡は昭和54年関西電力資材センターにおいての発掘調査によって発見された遺跡である。以前は南側に広がる郡遺跡の範囲内で周知されていた。以後、昭和55年12月～昭和56年2月にかけて関西電力資材センターにおいて第2次調査が実施された。関西電力資材センターにおいての調査では、AからD区の4トレンチが設定され、A区トレンチから弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式新段階）の方形周溝墓が検出されている。B区トレンチ及びC区トレンチでは、柱穴や土壙・溝が検



第3図 中河原遺跡発掘調査位置図

出されている。また、D区トレンチでは、中世井戸や土壙が検出され、井戸から12世紀中葉の瓦器碗と土師皿が出土している。

その後も日通茨木流通センター内の試掘調査などが実施され、弥生時代中期以降に郡遺跡の分村として成立したと推定されることとなり、中近世までわたる複合遺跡であることが判明している。

5 調査に至る経過

茨木市上郡1丁目に所在する日通茨木流通センター内において、倉庫建設が計画された。当該地は前述のとおり弥生時代から中近世にわたる複合遺跡である中河原遺跡の範囲内であることが周知されており、遺構の存在が予想された。そのため、埋蔵文化財確認依頼に基づき倉庫建設予定地内において試掘調査を実施した結果、中世の遺物を含む包含層が確認された。この試掘調査の結果をもとに依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成2年10月1日より本格的な発掘調査を実施することになった。

6 調査の方法

調査にあたっては協議の結果、倉庫建設面積の一部にあたる約250m²を対象にした。また、試掘調査の結果から該当地には1m近い盛土があり、遺物包含層がさらにその下の現地表下約1m以下に存在するため調査区全体を鋼矢板による土留工を施し、現地表下約1m近い盛土は重機で掘り下げ、以下は土層観察用のセクションを残して人力による掘削及び精査を実施した。

また調査にあたっては調査区に合せた任意の地区割を設定し、遺物取上げ及び測量のため3m×3mグリッドで調査をすすめた。
(濱野)

第2節 検出遺構と遺物

1 基本層序

調査区において普遍的にみられる下記の7層を基本層序とした。以下各層について概説する。ただし、今回の調査区においては、茨木川の後背湿地にあたっており調査区が東西に長いため、層相も複雑に変化する。特に第5層以下は場所によって大きく土層が違っており、また落ち込みについては鋼矢板の埋設深度より深くなり、安全のため最終層まで掘り下げることができなかった。

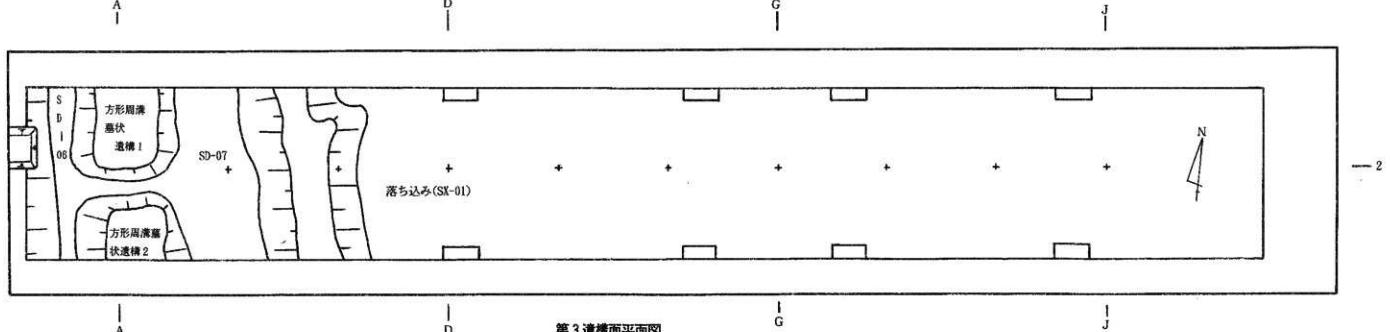
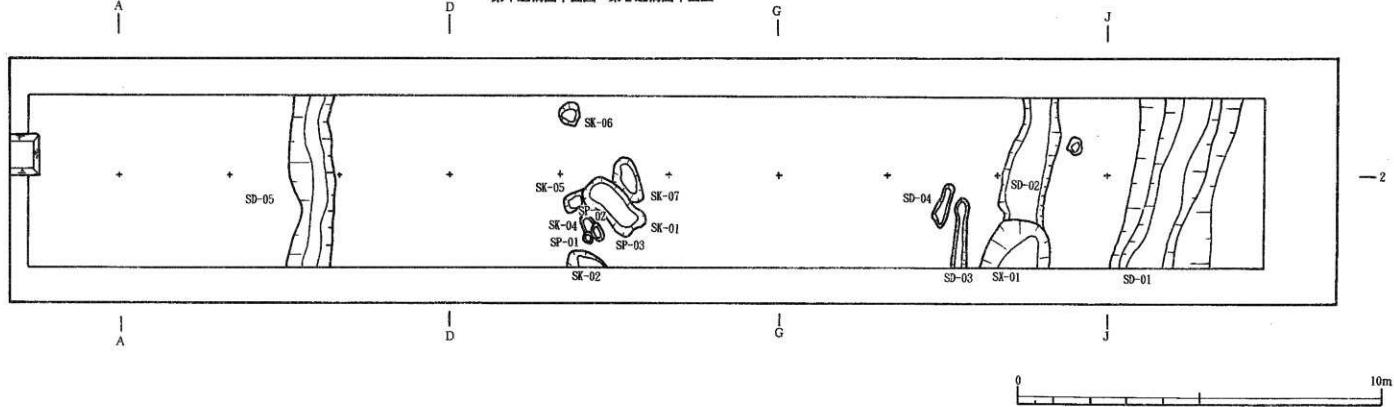
第1層 盛 土（日通茨木流通センター建設時の造成土）

第2層 旧耕作土（日通茨木流通センター建設以前の水田土壤）

第3層 床 土（日通茨木流通センター建設以前の水田床土）

第4層 黄灰色砂質土層（中世～近世遺物包含層）

第1遺構面平面図・第2遺構面平面図



第3遺構面平面図

第4図 中河原遺跡第1・2及び第3遺構面平面図

- 第5層 茶褐色粘質土層（奈良時代の遺物包含層・上面が、第1遺構面）
第6層 黄茶色粘質土層（弥生時代の遺物包含層・上面が、第2遺構面）
第7層 黒色粘質土層（地山層・上面が、第3遺構面）

2 遺構と遺物

今回の調査の結果、3時期にわたる遺構面が確認できた。第1遺構面では、近世の溝1条、中世の溝3条、集水池状遺構1基が検出された。第2遺構面では、土壤7基溝1条が検出されている。また第3遺構面では、弥生時代中期後半の方形周溝墓状遺構が2基、落ち込みが検出されている。以下、各遺構面での主要な遺構について検出状況と出土遺物について概説する。

検出遺構

第1遺構面（第4図）

S D - 01

調査区の東端において近世の南北溝を検出した。溝幅は平均2.5m、深さ約50cmを測り、埋土は灰白色粗砂である。出土遺物は、摩滅した弥生土器・東播系須恵器（第9図-27）・土師器・瓦器、そして伊万里系の陶磁器類等が出土している。

S D - 02・S X - 01

調査区の東部において中世の南北溝（S D - 02）及び集水池状遺構（S X - 01）を検出した。S D - 02の溝幅平均1.2m、深さ10cmを測る。S D - 02は調査区南端のS X - 01に流れ込んでいる。S X - 01の南側半分は調査区外に延びており検出幅の最大は1.8mで深さ約20cmを測る。両溝の埋土は灰色粘質土で須恵器・土師器の他あまり摩滅していない瓦器片が出土している。

S D - 03・S D - 04

調査区の東部において、小さな溝を2条検出した。埋土はS D - 02と同じく灰色粘質土であるので遺物の出土はなかったものの、ほぼ同時期のものと思われる。

第2遺構面（第4図）

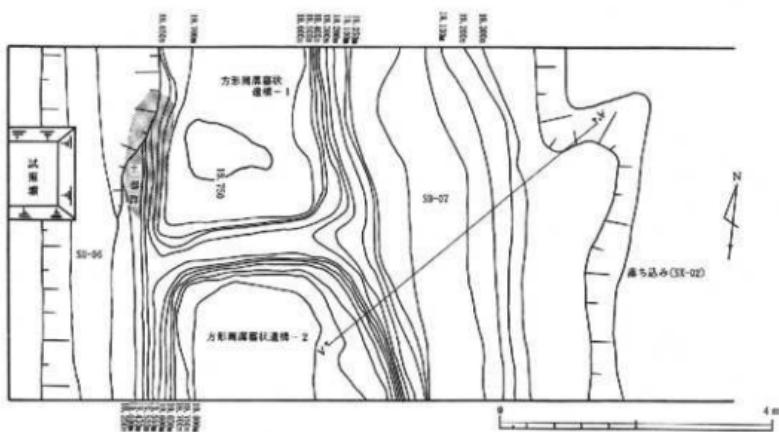
S D - 05

調査区の西部において奈良時代の南北溝を検出した。溝幅は平均1.2m、深さ約20mを測り、埋土は黄灰色粗砂である。出土遺物は、摩滅した弥生上器・須恵器・土師器が出土している。

S K - 01～S K - 07

調査区中央部において検出した奈良時代の土壤群である。大きさ及び形状はまちまちで、S K - 01が一番大きく長軸1.8m・短軸0.8mを測る。埋土はすべて黄灰色粗砂で、S K - 02から8世紀後半の須恵器の坏身が出土している。（第9図-12）

また、S K - 01・S K - 03・S K - 07から摩滅した弥生土器片が出土している。



第5図 中河原遺跡 第3造構面平面図（方形周溝墓状造構付近）

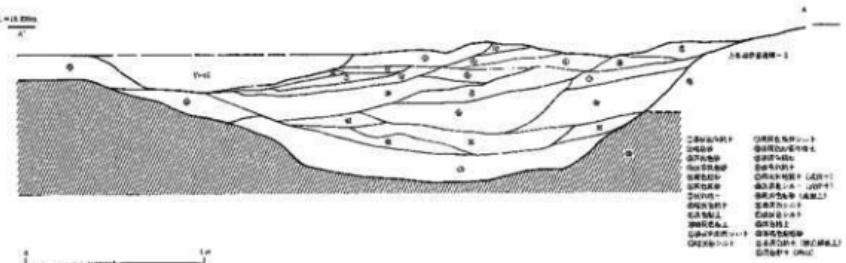
第3造構面（第4図・第5図）

方形周溝墓状造構－1

調査区北西端において検出した。調査範囲の制約から、周溝・墳丘の大半は調査区の北側にあり、周溝によって画された南側の一辺及び南西・南東部のコーナー、西・東側辺の一部を検出している。ただし南側の一辺及び西・東側の周溝は、方形周溝墓状造構－2と共有している。墳丘規模は墳裾の東西が約2.8m、周溝内縁の肩部で隅間東西約1.7mを測り、墳丘は南北方向に約2m分検出している。墳丘の上部は削平されているが、墳丘と推定できる高まりに若干の盛土も認められる。周溝は、西側（SD-06）が幅約1.5m・深さ約0.6mで断面形状は浅い逆台形を呈している。東側（SD-07）は幅約3.4m・深さ0.7mで断面形状は深い逆台形を呈している。また、西側の周溝（SD-06）には、多数の土器が検出されており、ほとんどが弥生時代中期後半（畿内第IV様式）の土器群である。

方形周溝墓状造構－2

調査区南西端において検出した。調査範囲の制約から、周溝・墳丘の大半は調査区の南側にあり、周溝によって画された北側の一辺及び北西・北東部のコーナー、西・東側の一部を検出した。規模は、墳裾の東西が約2.6m、周溝内縁の肩部で隅間東西約1.5mを測り、墳丘は南北方面に約1.5m検出している。墳丘は方形周溝墓状造構－1と同じく後世に削平されており、墳丘と推定できる高まりに若干の盛土が認められるのである。溝としての現状の規模は、西・東側とも方形周溝墓状造構－1と共有しているためほぼ同じである。



第6図 方形周溝墓状遺構-1・2周溝 (SD-07) 断面図

ただし北側の周溝規模はやや狭く幅約1.2m・深さ約0.6mで断面形は浅い逆台形を呈している。遺物は周溝から方形周溝墓状遺構-1と同じく弥生中期後半(畿内第IV様式)の土器が出土している。

今回検出した方形周溝墓状遺構-1・2の溝は、『コ』の字の屈曲して北壁あるいは南壁へと伸びる溝である。墳丘と推定できる高まりには若干の盛土があり、西側の周溝(SD-06)には、多數の土器群が検出されており供献土器の可能性もある。また、本調査地西侧の関西電力資材センターにおける調査で弥生時代中期(畿内第III様式新段階)の方形周溝墓が検出されていることを考えると、『コ』の字に曲がる溝と高まりは方形周溝墓の可能性が高い。しかし墳丘の規模が小さく埋葬施設等は確認されておらず出土した土器も完形品は少ない。また、出土した土器のほとんどが破片で口縁部が多く底部が少ない。

これからは方形周溝と考えるに否定的な要素であり、あるいは、墳丘と推定したる高まりは茨木川の旧河道中の高まり(中洲)の可能性もある。出土した土器についても、旧河道中で再堆積したため完形品は少なくほとんどが破片になっていることも考えられる。これからそのためあえて断定をさけ方形周溝墓状遺構とした。

落ち込み(SX-02)

調査区中央部において検出した。但し、落ち込みは東へ向かって緩やかに深くなるので鋼矢板の埋設深度の関係で最終層までは掘削できなかった。この落ち込みは茨木川の後背湿地と考えられ、落ち込みの肩付近に土器が集中しており、東へ向かうにしたがって土器の出土量が減っていき、東端においては1片しか出土しなかった。落ち込みの堆積層は上層では灰色のシルト～粗砂が互層状に細かく堆積しており、下層になると黒色の粘土に変化していく。また、土器の出土も上層が多く下層ではほとんど出土しない。出土した土器は方形周溝墓状遺構の周溝の土器と同じく弥生中期後半(畿内第IV様式)に属する土器が出土している。

出土遺物

出土遺物は、第3遺構面の方形周溝墓状遺構、及び落ち込みから出土した弥生土器が大半を占め、ほとんどが破片で完形品は全くない。しかも、測図を果せた資料は時間的に制約されたため出土した一部に限られている。出土遺物についての概略としては、主として方形周溝墓状遺構及び落ち込みからの出土遺物を中心に記述する。また、奈良時代・中世の遺物は出土量の割に図化できる資料は少なく、僅かに3点に過ぎない。

方形周溝墓状遺構-1・2出土の土器（第7図・第8図-1～18）

(1～5)は壺形土器である。

(1)は口縁部端面を上下に拡張し、凹線文をめぐらす。口縁部内端上面には櫛描原体による櫛描列点文を施している。また、頸部には1帯の櫛描直線文がめぐらされている。口径は24.6cmを測る。色調は明橙色を呈し、焼成は良好である。

(2)は、口縁部端面は上下に拡張し、2条の凹線文をめぐらす。頸部には刷毛目調整を施す。口径は24.6cmを測る。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

(3)は、斜上方に立ち上がり、上端で曲折して内傾しながら立ち上がる。頸部には指頭圧痕突帯文がめぐらされている。口径は27.4cmを測る。色調は明黄色を呈し、焼成は良好である。

(4)は、横にひろがる頸部から上方に長く、下方に短かく端部を拡張する。端面には、櫛描列点文及び簾状文を施す。口径は17.4cmを測る。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好である。搬入土器で、北河内産と思われる。

(5)は、短く外方にひらく頸部から口縁部にいたる壺で口縁端部に刻み目を施す。頸部外面は縦方向の荒い刷毛目調整を施す。また、口縁端部上面は斜め方向に、口縁部から頸部にかけての内面には横方向の刷毛目調整を施す。口径は11.7cmを測る。色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。近江系と思われる。

(6・7)は、壺または壺の底部である。

(6)は、外面を縦方向の荒い刷毛目調整を施す。底部外面には木葉痕があり、底径は7.6cmを測る。色調は淡灰黄色を呈し、焼成は良好である。方形周溝墓状遺構-1出土。

(7)は、外面は磨滅のため調整不明である。内面は、荒いヘラケズリを施す。底径は9.2cmを測る。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

(8～12)は、壺形土器である。

(8)は、「く」の字状に屈曲する口縁部で、口縁端部は面をもち上方にややつまみあげる。口径は23.0cmを測る。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

(9)は、「く」の字状に屈曲する口縁部で、口縁端部に面をもち、刺突列点文を施す。口縁上面は斜め方向あるいは横方向に荒い刷毛目調整を施す。口径は29.7cmを測る。色調は淡灰黄色を呈し、焼成は良好である。

(10)は、ゆるやかに外反する口縁部をもち、体部外面に縦方向を荒い刷毛目調整を施す。

また、内面は横方向に荒い刷毛目調整を施した後、斜め方向の細かい刷毛目調整を施す。口径は33.4cmを測る。色調は淡灰黄色を呈し、焼成は良好である。畿内第Ⅱ様式。

(11)は、「く」の字状に屈曲する口縁部で、口縁端部は面をもち、上方にややつまみあげる。体部外面はタタキ目調整後、斜め方向の荒い刷毛目調整を施す。内面は横方向あるいは斜め方向の荒い刷毛目調整を施しているが、磨滅のため調整がわかりにくい。口径は32.0cmを測る。色調は淡灰黄色を呈し、焼成は良好である。

(12)は、「く」の字状に屈曲する口縁部で、口縁端部に面をもち上方にややつまみあげる。口縁部及び口縁端部上面はヨコナデを施す。体部外面は磨滅のため調整不明。口径は28.8cmを測る。色調は明黄色を呈し、焼成は良好である。

(13・14)は水差し形土器である。

(13)は、短い頸部からゆるやかに外反し、口縁端部は上下に肥厚する。口縁部には凹線文状を呈するヨコナデを施す。体部外面には列点文を施す。また、体部上部に半環状把手をはめ込み式にとりつけている。口径は14.1cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

(14)は、腰が低く強く張り、体部上半が大きく内弯する。口縁部は消失し、体部上部に半環状把手をはめ込み式にとりつける。体部の外面上半は櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施す。体部下半は横方向及び縦方向のヘラケズリを施す。底径は5.1cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。

(15)は、小型の變形土器である。「く」の字状に屈曲する口縁部で、口縁端部は面をもち上方にややつまみあげる。体部外面は横方向及び縦方向のヘラケズリをくわえ体部内面はナデ調整を施す。また、体部内外面に煤が付着している。口径は21.4cmを測る。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。

(16～18)は、高环形土器である。

(16)は、短い柱状部に凹線文をめぐらし、脚部は斜めに小さくひらくとともに端部を上下に拡張する。脚部上部にはスカシ孔がある。脚部外面下半の裾部は縦方向のヘラミガキを施している。また、裾端部はヨコナデを施す。脚径は12.5cmを測る。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

(17)は、直立する柱状部から斜めにひらく坏部である。坏部下半から脚柱部にかけて縦方向のヘラミガキが施され、坏部底と脚部との間に円板充填が認められる。色調は淡茶黄色を呈し、焼成は良好である。

(18)は、短い柱状部に凹線文をめぐらし、脚部斜めに小さくひらく。端部を上下に拡張する。また、脚部下半の裾部にはスカシ孔があり、外面下半の裾部は荒い刷毛目調整を施す。脚部内面下半の裾部は縦方向のヘラケズリを施している。脚径は12.1cmを測る。色調は赤茶褐色を呈し、焼成は良好である。

落ち込み（SX-02）出土の土器（第8図-19～23）

(19) は、頸部からなめらかに外反し、斜上方にひらく口縁部。口縁端部を上下に拡張し、口縁部端面には凹線文を施す。口縁部内面には櫛描列点文を施す。頸部外面は縦方向の刷毛目調整を施し、指頭圧痕突帯文めぐらす。口径は23.5cmを測る。色調は淡黄灰色を呈し、焼成は良好である。

(20) は、頸部斜外方にひらき、上端で屈曲してひらく口縁部。口縁端部を上下に拡張する。口縁部端面には凹線文をめぐらし、口縁部内面には櫛描列点文を施す。口径は24.0cmを測る。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。

(21) は、斜めにひらく口縁部。口縁端部を上下に拡張し、口縁部下端に刻み目を施す。また、口縁部内面には荒い刷毛目調整を施している。口径は18.0cmを測る。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。

(22) は、鉢形土器である。体部から稜をつくって屈曲して立ち上がる。外面上半は凹線文をめぐらし、外面下半は縦方向のヘラミガキを施す。口径は23.6cmを測る。色調は淡黄色を呈し、焼成は良好である。

(23) は、高壺形土器である。壺部から口縁部が水平にひろがり、端部を下方へ屈曲させて拡張し巾広い垂下部を形成する。口縁部上面及び垂下部外面にはヘラミガキを施す。口径は32.8cmを測る。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好である。

落ち込み（SX-02）及び方形周溝墓状遺構-2出土の石器（第9図-24～25）

(24) は、外弯背直線刃石庖丁である。中央部から半分欠損する。残存幅は3.7cm、厚さ0.65cm、重さ19.8gで材質は粘板岩である。落ち込み（SX-02）出土。

(25) は、石核である。一部自然面を残すが周縁部を余すところなく打ち欠いている。幅は4.7cm、厚さ0.9cm、重さ53.5gで、材質はサヌカイトである。

第1遺構面および第2遺構面出土の土器（第9図-26～28）

(26) は、青磁碗の底部である。逆台形のしっかりとした高台をもつ。文様は、体部外面下半に櫛による施文、内底面には1本の沈線をめぐらしている。釉は淡緑色で、高台の内外は露胎となっている。底径は3.9cmを測る。同安窯系。包含層（黄灰色砂質土層）内出土。（第1遺構面）

(27) は、東播系中世須恵器の捏鉢である。口縁部は上方に拡張している。内外面ともナデ調整。SD-01埋土内出土。（第1遺構面）

(28) は、須恵器の壺身である。平底から屈曲して直線にやや外開きに立ち上がる口縁をもつ。底部は未調整で、口径は14.2cmを測る。奈良時代頃のものと思われる。SK-02埋土出土。（第2遺構面）

（濱野）

第3節 ま と め

中河原遺跡は、昭和54年の発掘調査以来試掘を含めて何度か調査を実施しているが、未報告のため詳しい遺跡の概要是知られていない。僅か1本のトレンチ調査による事実関係ではあるが、今回の発掘調査で判明した二・三の成果をまとめ、若干の問題点を示して調査のまとめとしたい。

(1) 今回の調査地は中河原遺跡においても周辺部あたり、茨木川の氾濫源あるいは後背湿地と考えられていた。今回この考え方を肯定する形で弥生時代の落ち込みが検出され、茨木川と弥生集落との境界が判明した。また、トレンチの西端で検出した方形周溝墓状遺構は弥生時代中期の墓域の東端にあたる可能性が高くなった。

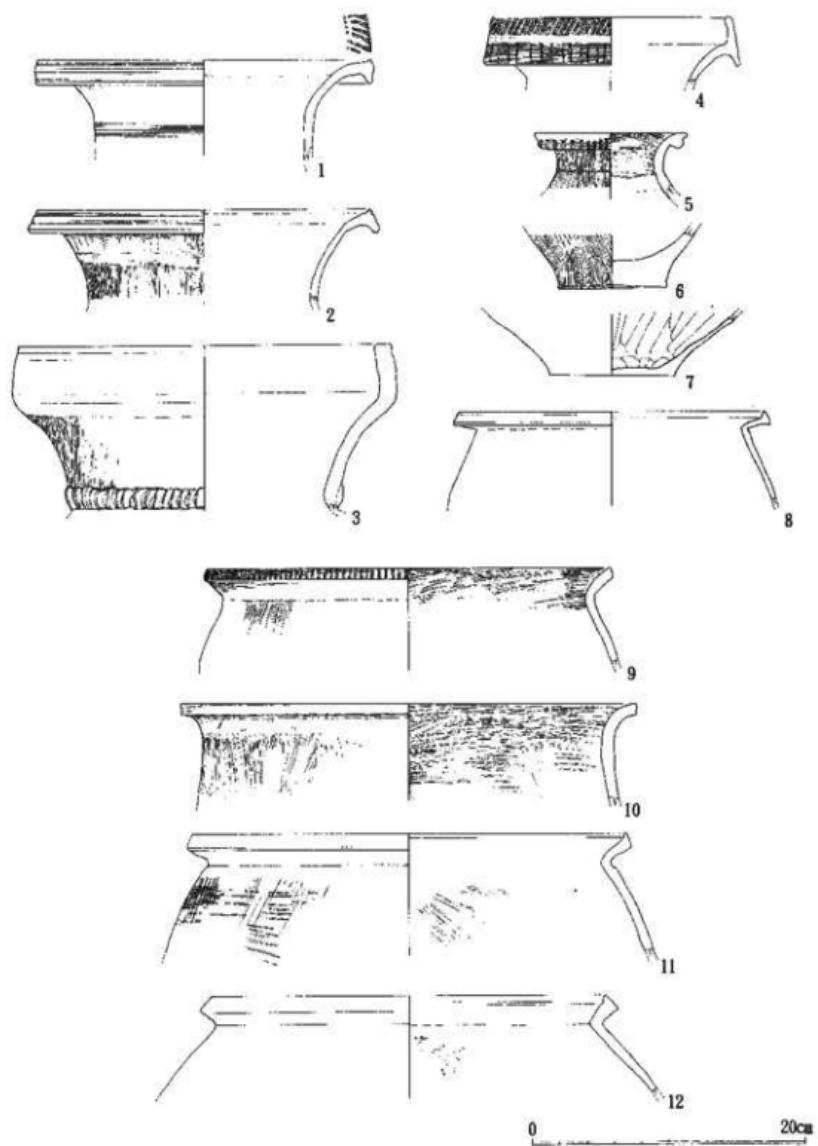
(2) 今回検出した方形周溝墓状遺構は、墳丘規模が小さく埋葬施設等も検出されていないため、方形周溝墓と考えるのに躊躇したが、東奈良遺跡においては、¹¹⁾墳丘規模が4~5mの小型の方形周溝墓も検出されている。今後市内および近辺における小型の方形周溝墓の類例增加に期待したい。

(3) 出土遺物では北河内から搬入された壺や近江系の壺など、他地域との交流を考える上での遺物の出土があった。また、畿内第Ⅱ様式の甕の出土は、中河原遺跡の成立が上記の時期まで遡る可能性を示している。

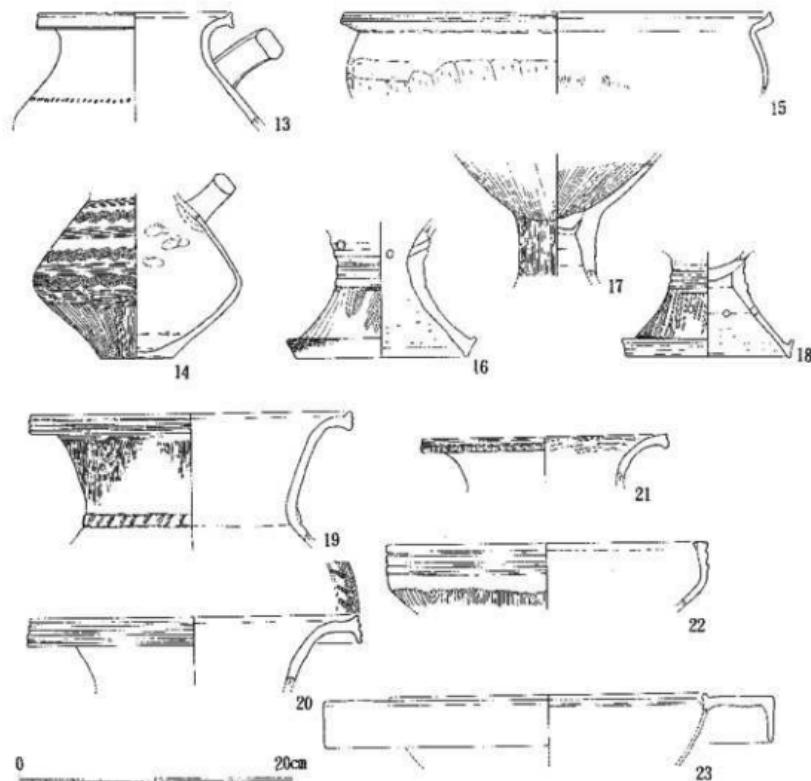
(4) 今回、第1遺構面で中世の溝、そして第2遺構面で奈良時代末頃の土壤や溝が検出され、中河原遺跡が弥生時代から中世までの複合遺跡ということが判明した。特に第1遺構面で検出した中世の溝や集水池状遺構や関西電力資材センターの調査で井戸から12世紀中葉の和泉型瓦器碗と土師皿がまとまって出土している。¹²⁾このことから、今後の発掘調査なかで上郡地域における中世村落の実態が解明されることに期待したい。 (濱野)

<註1> 大阪府教育委員会『東奈良遺跡発掘調査概要・II』1990年3月

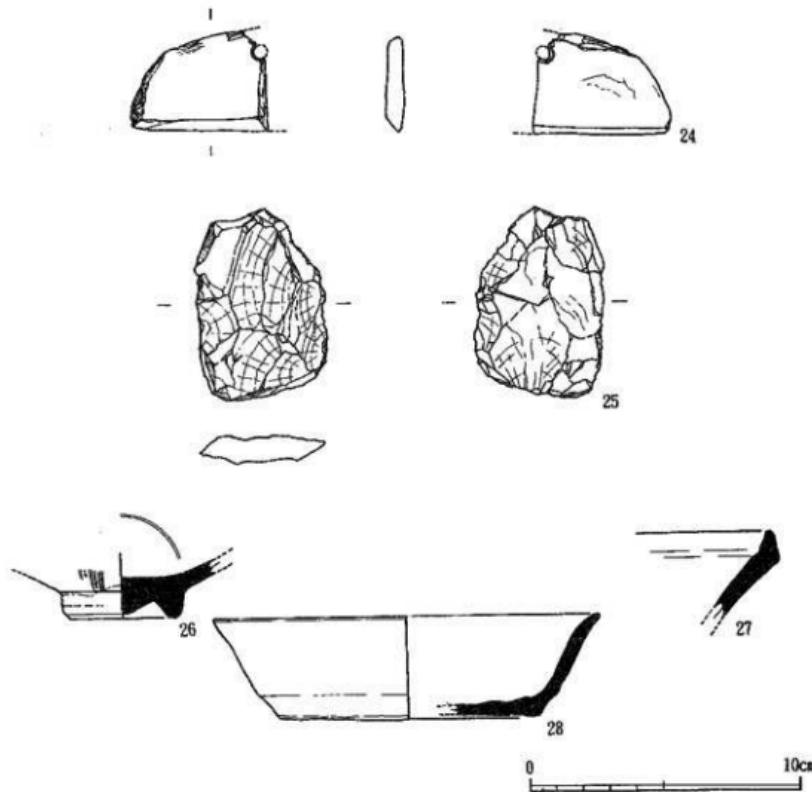
<註2> 中河原遺跡から出土している瓦器碗は、和泉型と楠葉型の両タイプが存在しているようである。茨木市内で瓦器碗を出土している遺跡のうち、現在のところ東奈良遺跡や宿久庄遺跡では和泉型しか出土しておらず、中条小学校遺跡の様に楠葉型のみ出土している遺跡もある。



第7図 方形周溝墓状遺構-1・2出土土器実測図(1)



第8図 方形周溝墓状造構-1・2、落ち込み(SX-02)出土土器実測図(2)



第9図 方形周溝墓状造構-2. 落ち込み出土石器及びSK-02・SD-01.
包含層出土土器図（3）

第3章 東奈良遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

1 所在地 茨木市沢良宜西一丁目27-1

2 調査面積 150 m²

3 調査原因 共同住宅建設

4 東奈良遺跡の既往の調査

東奈良遺跡は茨木市の南部の平地部に位置し、昭和46年に近くを流れる小川水路の改修工事中に掘り上げられた土砂の中から土器や石器などの遺物が発見されたのが最初である。以後、開発に先立つ緊急発掘調査が断続的に行われた結果、弥生時代前期以降相当長期間に及ぶ遺跡の存在が明らかになっている。

とくに、昭和48年から翌年にかけて発見された銅鐸・銅戈・勾玉の鉢范やその鋳造に関する轍口の破片の出土は、当時の新聞やテレビ等で大きく報道された。

また昭和51・52年、遺跡のはば中央を縦断する形で走る旧国鉄の貨物引込線建設に先立つ調査では、検出幅は狭いながらも弥生時代前期の環濠が検出され、また多數の遺構や多量の遺物が出土している。

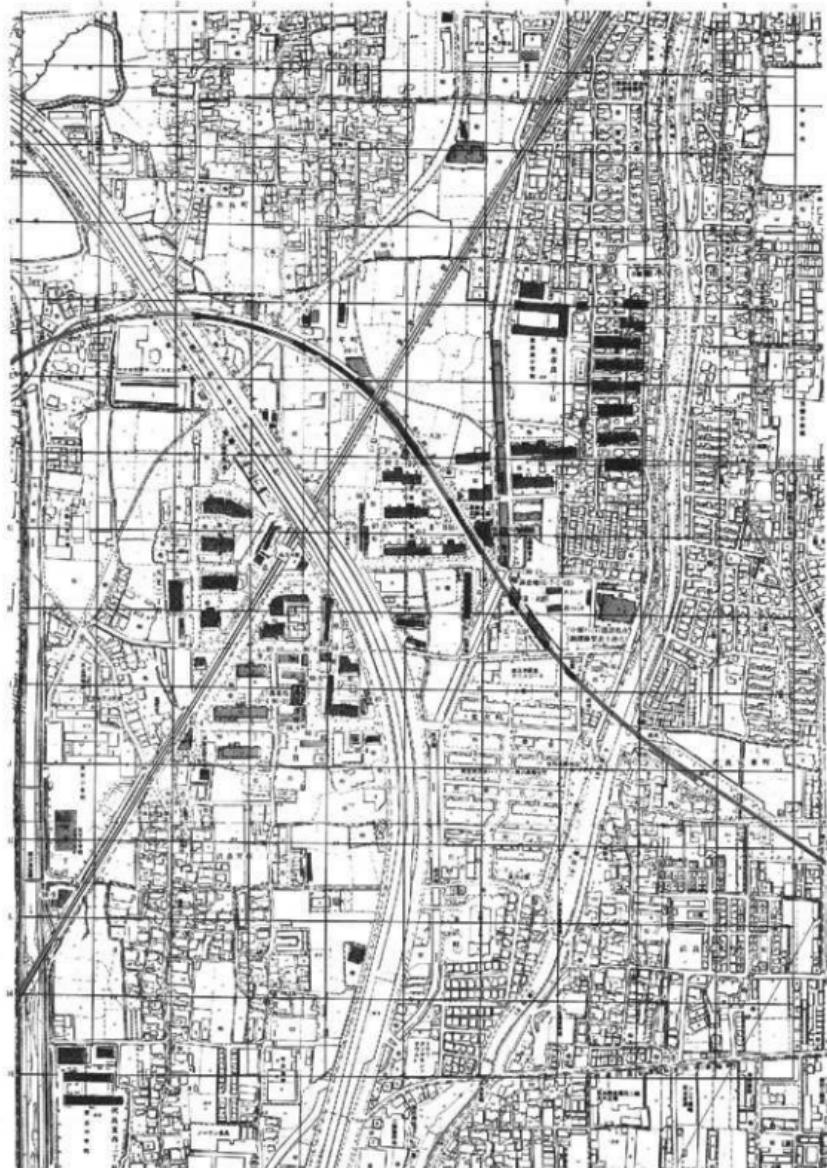
そのほかこの遺跡地における住宅開発などに伴う事前の発掘調査などからは、弥生時代前期の方形周溝墓・溝・土壙、同中期から後期にかけての大溝・竪穴住居跡・方形周溝墓、古墳時代前期の大溝・竪穴住居跡・戸兵などの多数の遺構やそれとともになう多量の遺物などが出土していることから、東奈良遺跡は弥生時代の初めから古墳時代前期に至るまでの間、若干の盛衰はあるもののこの地域の拠点的集落であったことがわかっている。

5 調査に至る経過

今回の調査区は、東奈良遺跡の南地域（HN H-4-E・F地区）にあたる場所である。調査の契機は個人の出資による賃貸マンション建設であるが、事前の発掘調査の必要性に関して関係者と幾度かの協議を重ねたが十分な相互理解が得られず、調査は工事とはほぼ並行するような形で行われたものである。

6 調査の方法

調査にあたっては協議の結果、約 150 m²の建築面積のうち建築工事の急ぐ所からはじめることとし、調査敷地を北側と南側の2期に分けて行った。まず1期として、矢板による工事用の土留作業が行われると並行して、重機による第1期掘削を行い、南側の調査区の遺物包含層及び遺構面の精査を行った。1期の調査終了後、北側の部分を2期として調査を行った。しかし、調査に至る経過でも記したように、調査が工事と並行して行われた



第10図 東奈良遺跡地図割り及び調査地域図

ことから十分な調査が出来なかったことは、個人出資による原因者の経費の負担などにおいて問題を提起した調査であった。

(奥井)

第2節 調査に至る経緯と経過

1 基本層序

土層は調査区の中央部を東西に走査する形で観察され、普遍的な6層を基本層序とした。第1層から第3層まではほぼ安定した堆積を示すが、東部では4層以下が大型溝状遺構の影響を受け、含水性の高い砂、砂質土、粘質土などが複雑に堆積している。

第1層	盛土（現駐車場の造成土）	1m
第2層	耕土	20cm
第3層	緑灰濁色土層～青灰色砂質土層（床土）	25～30cm
第4層	灰色砂質土層（弥生時代前期～古墳時代前期の遺物を含む包含層） この層の上面を生活面とする時期があったことが確認されているが、 工事の都合上検出を断念した。断面では遺構が観察できる。	45～50cm
第5層	黄褐色砂質土層（地山、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の生活面）	12cm
第6層	黄褐色粘質土層（地山、遺構検出面）	

2 遺構と遺物

当調査区から検出された遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の大型の溝一条、土壙が二基である。標高 5.8m付近の、黄褐色粘質土層上面を遺構検出面としている。

検出遺構（第12図）

大溝

大溝は、当調査区内ではその全体像を知ることはできないが、平成元年度調査HN-H-4-E・F地区で検出された溝-3との関連は明白である。この溝-3についてのべてみると、今回の調査区の北に隣接する平成元年度調査区の中央を、北西から南東に平行して連なる溝-3(W)と同じ(E)の2条の溝であり、2条の溝は調査区北部では合流するが、南部では幅 1.5m以上の堤をもって分流する。なお、この溝-3に交差・削平される形で、弥生時代前期の溝-1が確認されている。当調査区の大溝は、平成元年度調査区の溝-3から十数m南の延長線上で検出されており、層位的特徴とも合わせると、溝-3をなす二条の溝のうち、西侧へ分流する溝-3(W)より連続するものと思われる。

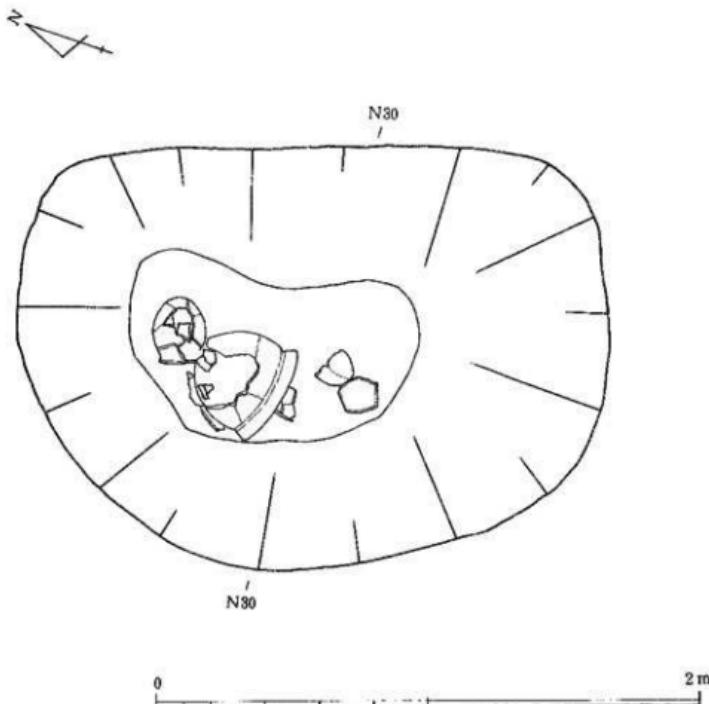
大溝は調査区を北西から南に連なるもので、規模は調査区北部で幅約 6m、深さ 1.4m以上、南部で幅 7m以上、深さ 80cm以上を測るが、安全対策上溝底まで確認できなかった。このため、東肩に関しては溝の埋没過程における一時期のものである可能性がある。溝内には砂、砂質土、粘質土などがレンズ状もしくはブロック状に複雑に堆積し、その上

層堆積層によって生活面・地山層は削られ、不明瞭な溝肩をなしている。

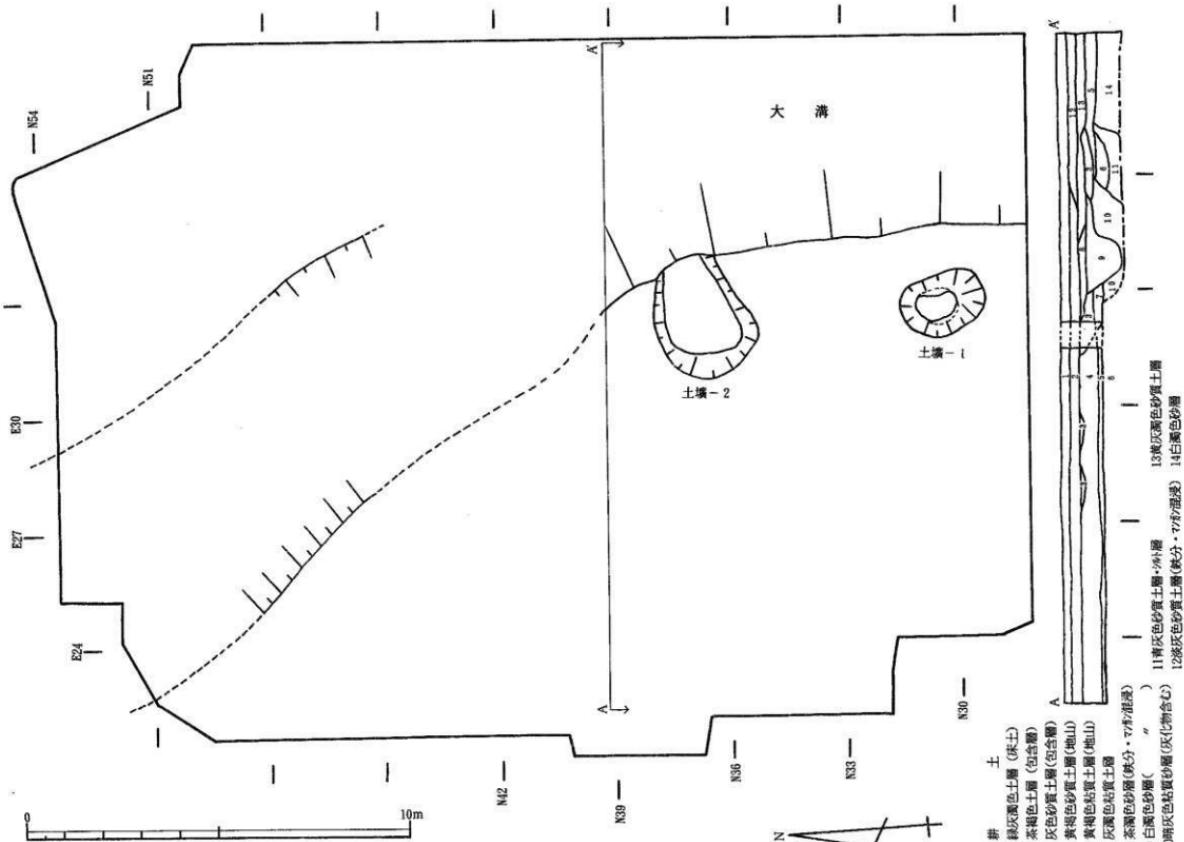
遺物は、各層より弥生時代中期から古墳時代前期初頭の椎多な土器片（図14図）が検出されている。層位的な検出は出来なかつたが、傾向としては中・下層に弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭のものが多くみられる。これらの層位的特徴は、平成元年度調査区の溝-3（W）にも見られるものである。なお出土層位は不明であるが、弥生時代前期の土器片（第14図-7）が1点出土している。これは平成元年度調査区の溝-1（弥生前期）との関連が推定される。

土壤-1（第11・12図）

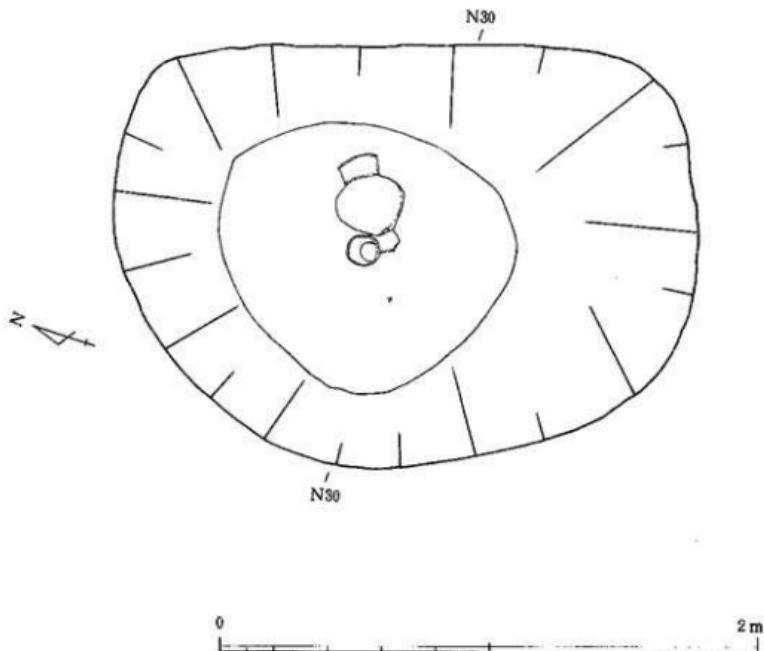
調査区南端、大溝の西側に位置する。長軸を北西-南東の方向にとり、検出面での規模は長軸 2.2m、短軸 1.55m、深さ 1mを測る。当初は深さ 70cmの土壤（上層）として検



第11図 土壌-1 上層土器出土状況図（1）



第12図 東奈良遺跡遺構平面図



第13図 土壙-1下層土器出土状況図(2)

出され、形態は梢円形摺り鉢状を呈したが、遺物を取り除くと二段に堀り込まれるようにして下層が確認され、井戸状の形態を呈した。上層は茶褐色砂質土が堆積し、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭（庄内式併行期）の壺・甕・鉢形土器など（第15図-22・24・25）が検出された。また下層は灰色砂質粘土が堆積し、墳底に接する形で、上層とほぼ同時期の完形の壺形土器など（第15図-20・21）が出土している。

土壙-2

調査区中央部南側に位置し、大溝に接する形で検出された。長軸を東北東-西南西にとり、検出面での規模は長軸 3.2m以上、短軸 2.4m、深さ 20m前後を測る。平面形はやや歪んだ隅円長方形で、墳底は平坦である。土壙内は灰色砂質土が堆積し、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器片（第15図-23・26・27）が出土した。 （中東）

出土遺物

出土遺物は大溝から出土した土器が大半を占めている。1点のみ弥生時代前期の甕が混入しているが、他はすべて古墳時代前期初頭の庄内式併行期に属する土器である。また、測図を果たせた資料は時間的に制約されたため、大溝及び土壤出土の遺物を中心とし、他はごく一部を取りあげたにすぎない。

大溝出土の土器（第14図-1～19）

（1～5）は壺形土器である。

（1）は二重口縁壺である。口縁端部のみであるが水平に近くのびる口縁で、口縁端は上に立ち上がる。口縁上端部に刻み目を施す。また、口縁端部には、櫛描波状文と2個1対の円形竹管文を施す。口縁端部内面は横方向のヘラミガキ。口径は20.4cmを測る。色調は灰褐色を呈する。焼成は良好である。

（2）は二重口縁壺である。口縁端部のみで頸部は殆ど残存していない。水平にのびる口縁部である。口縁端は上に立ち上がり、下にわずかに張り稜を有する。口縁上端部に刻み目を施す。また、口縁端部には、櫛描波状文と円形竹管文を施す。口縁端部内面は横方向のヘラミガキ。口径は25.1cmを測る。色調灰褐色を呈する。焼成は良好である。

（3）の頸部は「く」の字状に屈曲し、体部は球形を呈する。頸部から肩部にかけての外面に横方向のヘラミガキを施す。口径は12.0cmを測る。色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。

（4）は体部は球形を呈し、退化した小さい底部がつく。体部外面には横方向のヘラミガキを施した後、部分的に刷毛目調整を施す。最大復径13.9cmを測る。色調は灰褐色を呈する。焼成は良好である。

（5）は頸部で短く立ち上がり口縁に向けて外反する。頸部外面は摩滅が著しいが、一部縱方向の刷毛目調整が部分的に施される。色調は灰褐色を呈する。焼成は良好である。

（6～10）は壺形土器である。

（6）は口径15.2cmを測る完形品の甕である。口縁部はやや外反し、体部外面には斜方向のタタキが施されている。底部外面はヘラケズリを施す。また、体部外面下半には煤が付着している。色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。

（7）は如意形口縁のいわゆる遠賀川式の甕で、短く外反させた口縁部の端面下端にヘラによる刻み目を施す。頸部には1条のみヘラ描沈線を確認した。全体的に摩滅している。口径は37.0cmを測る。色調は灰褐色を呈する。焼成は良好である。畿内第I様式新段階に相当する。

（8）は小型の甕で、長胴形の体部から口縁部がゆるやかに屈曲する。体部外面には斜方向のタタキが施されている。口径は13.1cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。

（9）は小型の甕で、球形の体部から口縁がゆるやかに屈曲する。体部外面には斜方向の

タタキが施されている。口径は14.4cmを測る。色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。

(10) も小型の壺で、球形の体部から口縁部が「く」の字状に屈曲し外反する。体部外面には雑な刷毛目調整を部分的に施す。口径は13.2cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。

(11~14) は高壺形土器である。

(11) ば浅い壺部の口縁が外側に稜をつくり外反しながら上方向に開く。壺部から脚柱部外面にかけての縦方向のヘラミガキを施す。壺部内面は斜方向のヘラミガキを施す。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

(12) は壺底部は僅かに内弯し、短く外反する口縁部を持つ。内外面横方向のナデ調整。色調は淡赤褐色を呈する。焼成は良好である。

(13) の口縁部は、直線的に外方に開き、稜を残して壺底部に続く。壺底部外面にヘラミガキを施す。色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。

(14) の壺底部は直線的に外方に伸び、大きく外反する口縁部をもち、端部は僅かにつまみあげられている。口縁部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキを施す。口径は20.5cmを測る。色調は灰褐色を呈する。焼成は良好である。

(15) は小型の鉢形土器である。内弯しながら直線的に外上方に伸び、口縁端部を丸く終らす。摩滅著しいが内面に放射状の刷毛目調整を施す。口径14.0cmを測る。色調は淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。

(16・17) は瓶形土器の底部である。底部に焼成前1ヶ所穿孔する。体部外面は斜方向のタタキが施されている。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。

(16~19) は壺形土器の底部である。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

土壤-1及び土壤-2出土の土器(第15図-20~29)

(20~23) は壺形土器である。

(20) は、口径15.8cmを測る完形品の二重口縁壺である。短い筒状の頸部から口縁部が、水平にひろがり端部は僅かに外方に立ち上がる。体部は中央に最大径があり、底部は平底となっている。調整は口縁部が横方向のナデ、頸部には横方向の刷毛目調整を施す。体部外面は細かい横方向あるいは斜方向のヘラミガキ、内面底部付近には、横方向のヘラミガキ及び刷毛目調整を施す。また、体部外面に編み籠の痕跡と思われる筋目が数条残っており、使用方法が推測できる。最大腹径は27.5cm、色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。他地域からの搬入品の可能性が高い。土壤-1下層出土。

(21) は、口径14.9cmを測る完形品の壺である。大きな球形の体部と直線的に外傾するしっかりとした口縁をもつ大形の壺である。口縁端部は平らな面を持ち、くびれ部接合線は明瞭である。調整は口縁部は横方向の粗い刷毛目調整を施した後、縦方向のヘラミガキを施す。また、最大腹径には部分的に横方向のヘラミガキを施す。内面は、横方向の刷

毛目と横ナデ調整を施す。色調は淡黄色を呈する。焼成は良好である。

(22) は頸部からゆるやかに屈曲し、直線的に外傾する口頸部を持つ。口縁端部は僅かに外反し稜を持つ。全体的に摩滅が著しく調整不明。口径は 13.0cm を測る。色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である。土壤 - 1 上層出土。

(23) は、頸部からゆるやかに外傾し立ち上がる。全体的に摩滅が著しいが、部分的に縦方向のヘラミガキが認められる。色調は淡赤褐色を呈する。焼成は良好である。

(24) は甕形土器である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部に面を持つ。体部外面は右上がりの粗いタタキがみられる。内面はナデ調整を施す。口径は 16.4cm を測る。色調は淡黄色を呈する。焼成は良好である。土壤 - 2 出土。

(25~27) は壺または甕底部である。

(25) は底部付近には粗いタタキが施されている。他の部分は摩滅のため不明。低径は 2.0cm を測る。色調は暗黄色を呈する。焼成は良好である。土壤 - 1 出土。

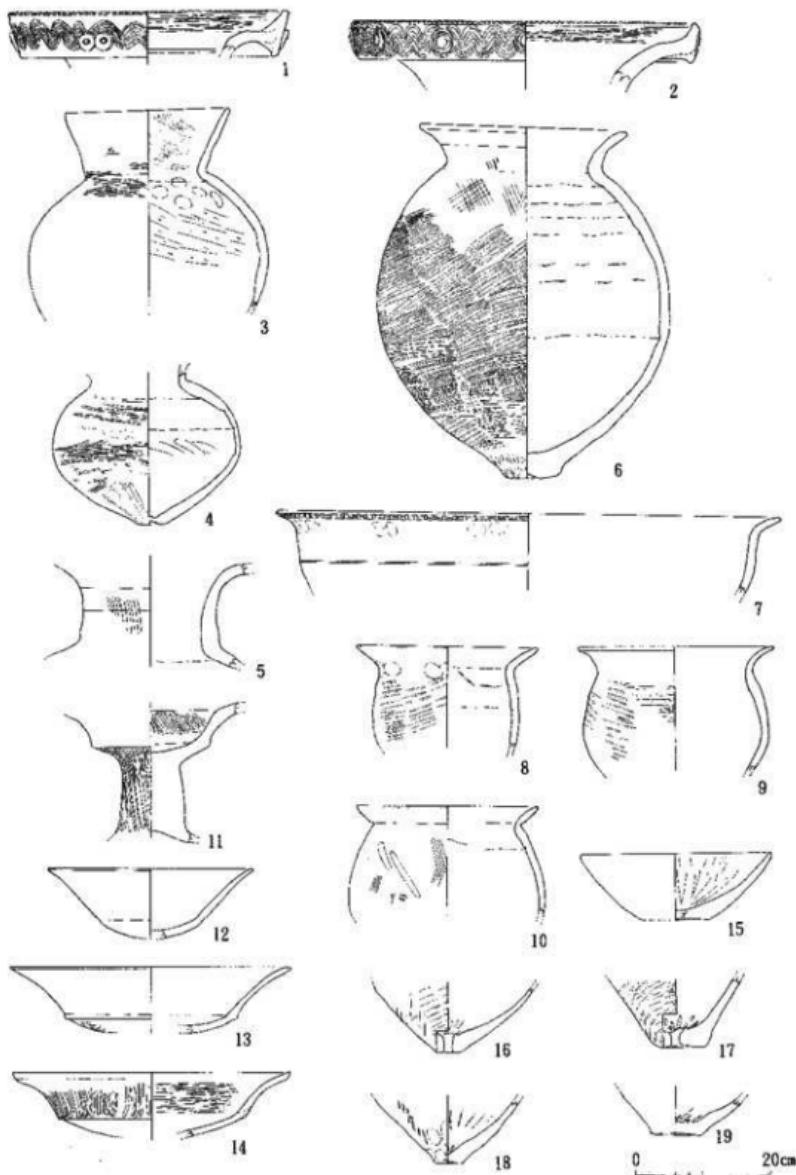
(26) は外面に縦方向のヘラミガキを施す。低径は 4.1cm、色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。土壤 - 2 出土。

(27) は全体的に摩滅しているため調整不明。低径は 7.2cm を測る色調は淡黄褐色を呈する。焼成は良好である。土壤 - 2 出土。

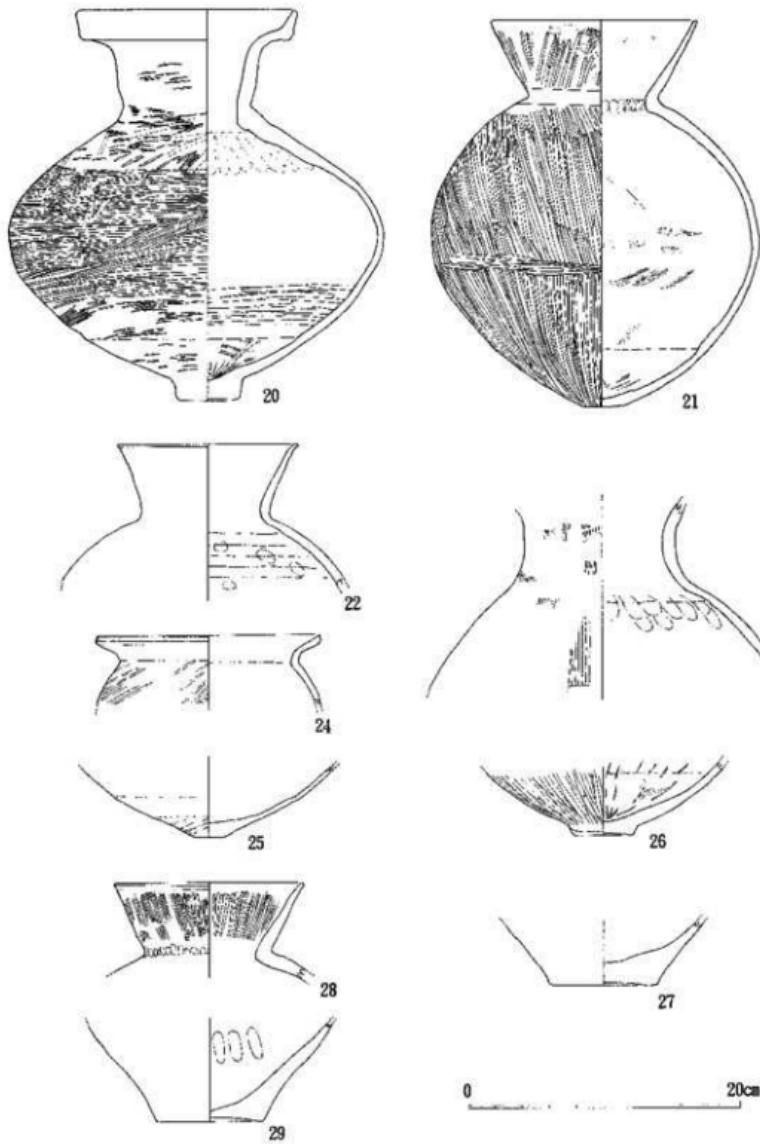
包含層出土土器（第15図-28~29）

(28) は壺形土器である。頸部から「く」の字状に強く屈曲したのち、直線的にのびる口頸部を持つ。口縁端部は外傾する面を持っている。調整は横ナデ後、内外面とも縦方向のヘラミガキを施す。口径は 13.6cm を測る。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

(29) は壺または甕底部である。全体的に摩滅しているため調整不明。低径は 7.7cm を測り、色調は黄褐色を呈する。焼成は良好である。 (演野)



第14図 大溝出土土器実測図



第15図 土壌-1・2. 包含層 出土土器実測図

第3節 ま と め

調査そのものに問題をはらんだ緊急調査であるが、重要な点を列挙すると、下記のごとくなろう。

(1) 当調査区では、弥生時代後期から古墳時代初頭のものとみられる大溝が検出された。これは上記のごとく、当調査区の北に位置する平成元年度調査のH-4-E・F地区で検出された溝-3(W)と同一の溝である。なお、当調査区の南のH-4-M・N地区で⁽¹⁾弥生時代中期の墓域が確認されているが、大溝の続きは検出されていない。この大溝は西方⁽¹⁾に向⁽¹⁾きを変えながら、現在の中央環状線に沿って存在する谷に向かって流れしていくものと思われる。これらの溝が、自然流路か人工的な溝かは明確ではないが、その規模からみて自然流路に手を加えて改修しつつ、生活環境の改善を図ったとみることができる。

(2) 当調査区で検出された大溝は、周辺における概往の調査から所属時期が庄式内併行期(3世紀中葉)を中心とすることが判明していた。今回の調査でも弥生前期から弥生後期までの古い時期の遺物を夾雜させるも、庄内式併行期(東奈良編年Ⅱ～Ⅲ一部Ⅳまでの)⁽²⁾を中心とする土器群が検出されており、北摂地域における当該期土器様式の地域色と形式編年を考察する上に新たな資料を提供したと言えよう。

(3) 大溝と同様に土壤-1も庄内併行期を中心とする土器群で構成されている。今回、土壤-1から出土した土器はすべて圓化できなかったが一部、庄内式でも古相期に遡る土器が認められた。しかし、全体的には庄内式でも布留式に近い新相期の土器群で從来の東奈良編年ではⅣ期の土器群と理解される。

(4) 移入土器に関しては、大溝および土壤-1・2から庄内式壺は検出されなかつたが、北摂地域あまり類例を見ない二重口縁壺(第15図-20)が土壤-1から出土しており、これが他地域からの搬入土器の可能性があると考えたいが、今後東奈良遺跡を含めた北摂地域における類例の増加を待ったうえで、在地産あるいは搬入土器かどうかの詳しい検討をしてみたい。

以上のように、今回の発掘調査は建築工事と並行して行われた調査であるが、いくつかの成果を得ることができた。本調査地点を含めた東奈良遺跡の南西部地域は、遺跡の様相がある程度判明しているものの、全体的にはまだ不明な点が多く、今後も東奈良遺跡全体の具体像を早期把握することに努めたい。

(濱野・中東)

<註1> 茨木市教育委員会「平成元年度発掘調査概報」1990年

<註2> 東奈良遺跡調査会「東奈良発掘調査概報Ⅰ」1979年

第4章 宿久庄遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯と経過

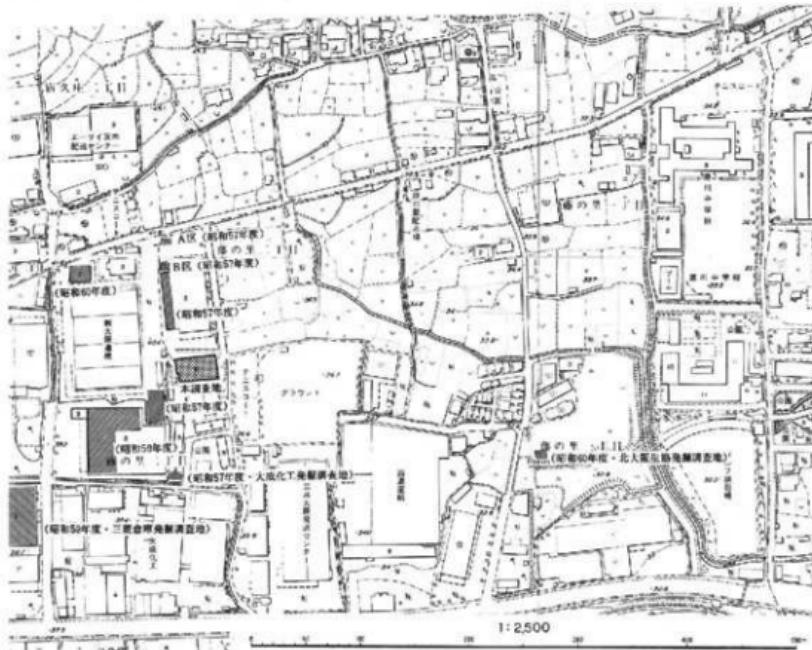
1 所在地 茨木市藤の里2丁目385-1

2 調査面積 500 m²

3 調査原因 倉庫増築

4 宿久庄遺跡の既往の調査

宿久庄遺跡は市域の北西部、国道170号線（旧西国街道）の北側、藤の里町から宿久庄・清水の各町にかけて広がる遺跡で勝尾寺川の左岸に位置している。宿久庄遺跡は、昭和50年に府道茨木～能勢線の拡幅工事に伴って行われた発掘調査によって発見された遺跡である。発掘調査の結果弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土し、以後、何度か発掘調査が実施され、宿久庄遺跡が弥生時代後期から中近世に及ぶ複合遺跡であることが判明



第16図 宿久庄遺跡発掘調査地位置図

している。しかし宿久庄遺跡における本格的な発掘調査はいまだ少なく、まとまりがないため遺跡の規模や性格など不明な点が多い。

この様な状況のもと本調査地の至近地にあたる藤の里2丁目に所在する三菱倉庫㈱において倉庫建設に伴う発掘調査が昭和59年度に実施されている。この時の調査では、古墳時代後期と思われる土壙や柱穴が検出されている。また、今回の調査地であるグンゼ株式会社の敷地内や、至近地の大成化工㈱の敷地内においても小規模な発掘調査が実施されている。近隣の藤の里1丁目の北大阪生協倉庫建設時にも小規模な発掘調査がおこなわれ、弥生時代から中世にかけての遺物や溝などの遺構が検出されている。さらに、宿久庄高松で採土中に奈良時代の藏骨器が単独で出土している。

5 調査に至る経過

茨木市藤の里2丁目に所在するグンゼ株式会社の敷地内において、倉庫建設が計画された。当該地は弥生時代後期から中世に及ぶ複合遺跡である宿久庄遺跡の範囲内であることが周知されており、遺構の存在が予想されたため、埋蔵文化財確認依頼に基づき、倉庫建設予定地内において試掘調査を実施した。試掘調査は現状が駐車場として利用されていたため、その使用に影響のない北東隅と南東隅の2ヶ所に試掘坑を設定した。

北東隅の試掘坑から近世の井戸が検出され、南東隅の試掘坑からは若干の奈良時代末から中世の遺物を含んだ包含層と古墳時代後期の遺物を含んだ落ち込みが確認された。この試掘調査の結果をもとに、依頼者と茨木市教育委員会とが協議を重ね、平成3年5月10日より本格的な発掘調査を実施することとなった。

6 調査の方法

調査にあたっては、倉庫建設予定地 500m²を対象とした。しかし車両・重機などの進入路等を確保する必要があるため、調査面積が若干減少することとなり、遺構の検出状況などに応じて調査区の拡張を行うことになった。また、試掘調査により当該地には1m近い盛土があり、盛土については重機で掘り下げ、排土は場外搬出を行った。そして重機掘削後は、人力による掘削及び精査を実施した。また調査にあたっては、調査区に合わせた任意の地区割を設定し、遺物取上げ及び測量のため 3m × 3m グリッドを設定して調査をおこなった。

(濱野)

第2節 検出遺構と遺物

1 基本層序

土層は調査区の東側および南側壁面において、攪乱もなく良好な形で観察された。基本層序は普遍的にみられる7層とした。なお第1層から第5層まではほぼ安定した堆積を示すが、第6層以下は落ち込みの影響を受け、南側ではやや堆積状況が異なる。

第1層	盛土（現駐車場建設時の造成土）	約 1m
第2層	旧耕作土	8~26cm
第3層	床土	3~10cm
第4層	明黄色砂質土層～青灰色砂質土層・シルト層（無遺物層）	5~20cm
第5層	黄灰色砂質土層～暗黄色粘質土層（弥生時代後期～中世の包含層） 調査区北西部を除く全域に広がり、瓦器碗、東播系須恵器、白磁碗、灰釉陶器、黒色土器などが検出されている。	5~35cm
第6層	茶褐色砂質土層・礫混土層（古墳時代後期の包含層、上面が第1遺構面） 調査区北西部で須恵器の短頸壺、北東部では須恵器の壺身・壺蓋などが検出されている。	3~40cm
第7層	暗褐色砂礫混土・粘質土層～暗灰色粘質土層（地山・上面が第2遺構面）	

2 遺構と遺物

検出遺構

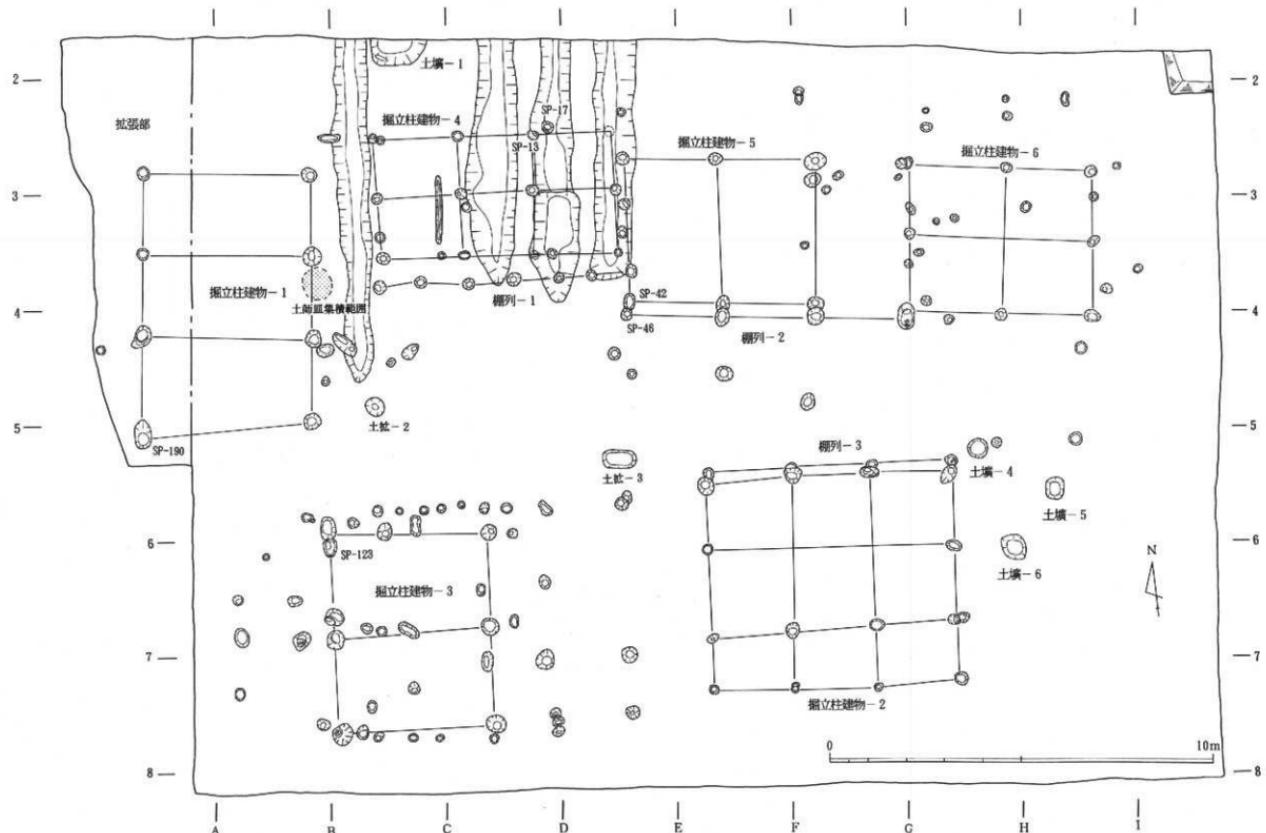
当調査区からは、2面の遺構面が検出された。

第1遺構面

遺構検出の第6層上面は、平均標高 41.3m 前後を測るが、概ね北西から南東に向けて下がっており、50cm前後の高低差が生じている。堀立柱建物6棟、柵列3列、土壤6基、柱穴約160個など、平安時代後期～中世の遺構が検出されている。掘立柱建物に関しては、まだ数棟見出される可能性もあるが、確実な6棟のみとした。なお調査区北西部の南北方向の溝は近世の耕作痕（鋤溝）である。

掘立柱建物-1

調査区西部に位置し、東側に掘立柱建物-4と土壤-2が近接する。建物は西側調査区外に延びていたため、拡張調査の対象となった。規模は梁行1間(4.4m)×桁行3間(6.25~6.7m)を測り、棟軸方向はN-5°-Eにとる。梁行の柱間がかなり大きくとられており、通常の住居とは違った用途の建物と思われる。穴の掘方は直径30~50cmを測るが柱痕は識別できなかった。遺物は、西側中央の柱穴から瓦器碗（第20図-1）のほか、東側の各柱穴から瓦器や土師器の破片が出土している。なお第6層上面で、東側の柱間に折り重なるようにして土師器の大皿・小皿や瓦器皿が置かれていた。これは、建物に関連した地鎮遺構に伴う遺物と思われる。



第17図 宿久庄遺跡 第1遺構面平面図

掘立柱建物-2

調査区南部中央に位置し、北側柱穴と棚列-3が重複する。規模は梁行3間(5.25m~5.4m)×桁行3間(6.35m)を測り、棟軸方向はN-89°Wにとる。柱穴の堀方は直徑20~50cmを測るが、柱痕はほとんど識別できなかった。南側桁部に関しては柱穴が小さく、全体の配列から見ても2間×3間の建物に付随するひさし部もしくは棚列と見ることができる。遺物は建物の内側に並ぶ柱穴のうち、東側のものから土師皿(第20図-4)、白磁片などを検出したほか、その他の柱穴からは瓦器・土師器・須恵器の破片、鉄製品などが検出されている。

掘立柱建物-3

調査区南西部に位置する。規模は梁行1間(4.1m)×桁行2間(4.8~5.0m)を測り、棟軸方向はN-1.5°Eにとる。柱穴の堀方は直徑35~50cmを測るが柱痕は識別できなかった。遺物は北西隅の柱穴から瓦器碗(第20図-3)のほか、各柱穴から瓦器・土師皿・須恵器の破片などを検出している。

掘立柱建物-4

調査区西北部に位置し、西側に掘立柱建物-1、東側に掘立柱建物-5、南側にはほぼ平行するように棚列-1が近接している。溝状造構と重複するため、柱穴の一部が検出できなかった。規模は梁行2間(3.1m)×桁行2間(6.1m)を測り、棟軸方向はN-87°Wにとる。柱穴の堀方は直徑20~35cmを測るが柱痕はほとんど識別できなかった。柱穴から中世の土師器・須恵器の破片が検出されている。

掘立柱建物-5

調査区北部中央に位置し、西側に掘立柱建物-4、東側に掘立柱建物-6が近接している。南側の各柱穴が棚列-2と重複して切られている。梁行1間(3.7m)×桁行2間(4.7m)を測り、棟軸方向はN-84°Wにとる。柱穴の堀方は直徑30~55cmを測り、柱痕は識別できなかったが、南側と北側の桁部中央の柱穴にそれぞれ、こぶし大の根石が置かれている。遺物は柱穴から土師器・須恵器の破片などが僅かに検出されている。掘立柱建物-6と同時期の可能性がたかい。

掘立柱建物-6

掘立柱建物-5の東側に位置する。南西隅の柱穴が棚列-2と重複して切られている。規模は梁行2間(3.7m)×桁行2間(4.7m)を測り、棟軸方向はN-82°Wにとる。柱穴の堀方は直徑25~40cmを測り、柱痕は識別できなかった。遺物は、柱穴より黒色土器A類碗・土師器・須恵器等の破片が僅かに検出されている。

棚列-1

掘立柱建物-4の南側に位置する。7個の柱穴の柱間寸法は1~1.2mを測り、建物の南側桁部から60cm前後離れてほぼ平行する。柱穴の堀方の直徑は25~30cmを測るが、柱痕は識別できなかった。西端の柱穴から深さをみてみると28cm, 12cm, 14cm, 30cm, 20cm,

35cmと交互に深い浅いを繰り返す。遺物は柱穴より瓦器・土師器・須恵器等の破片などが検出されている。

柵列－2

柵列を構成する4個の柱穴のうち、3個が掘立柱建物－5の南側梁部の各柱穴と、1個が掘立柱建物－6の南西隅の柱穴と重複している。柱穴の堀方の直径は20～40cmを測るが、柱痕は識別できなかった。4個の柱穴のうち西から二つめと東端のものにこぶし大の根石が数個づつ置かれている。遺物は中央西の柱穴から鉄滓が検出されたほか、各柱穴より土師器の甕片が検出されている。

柵列－3

柵列を構成する5個の柱穴のうち、4個が掘立柱建物－2の北側桁部の各柱穴に重複して切られている。柱穴の堀方の直径は30～35cmを測るが、柱痕は識別できなかった。東端のものにはこぶし大の根石が数個置かれている。遺物は柱穴より黒色土器・土師器の破片が僅かながら検出されている。

土壤－1

掘立柱建物－4の北側に位置し、土壤の北側は調査区外に延びるため全容は明らかではない。東西1.5m、南北65cm以上、深さ30cmを測る。土壤内は黄灰色～茶褐色の砂質土が堆積し、中世のものと思われる土師器片が僅かに出土した。

土壤－2

掘立柱建物－3の北側に位置する。長軸を北西～南東にとる。長さ66cm、幅60cm、深さ25cmを測り、形態は円形摺り鉢状を呈する。土壤内は4層に分かれ、上層の黄灰色砂質土より瓦器片を検出した。

土壤－3

掘立柱建物－2の北西側に位置し、長軸を東～西にとる。長さ85cm、幅60cm、深さ25cmを測り、形態は隅丸方形で平坦な壙底を呈す。土壤内は黄灰色砂質土が堆積し、遺物は検出されなかった。

土壤－4

掘立柱建物－2の北東に位置し、直径55cm、深さ40cm前後を測る。形態は円形で、平坦な壙底を呈する。堆積層は6層に分かれ、下層の茶灰色砂質土より中世のものと思われる土器片を僅かに検出した。

土壤－5

掘立柱建物－2の東側に位置する。長軸を北西～南東にとり、長さ70cm、幅58cm、深さ70cm前後を測る。円形の平面形態に平坦な壙底で、井戸に近い形態を呈している。堆積層は7層に分かれ、上層の暗褐色疊混粘質土より瓦器碗片を検出した。

土壤-6

掘立柱建物-2の東側に位置する。長軸を南-北にとり、長さ80cm、幅60cm、深さ38cm前後を測る。形態は梢円形で底はU字型を呈す。堆積土は6層に分かれ、下層の暗灰色砂質土より瓦器碗片を検出した。

柱穴

第一遺構面で検出された約160個の柱穴のうち、66個が掘立柱建物と冊列を構成するが、その他の柱穴に関しても、調査区南西部に位置するものを中心に掘立柱建物や冊列をかたちづくっていたと考えられる。これら柱穴の形態は、円形もしくは梢円形を呈しており、直径15~60cm、深さ3~50cmを測る。遺物は半分以上の柱穴から検出されているが、多くのものが細片あるいは摩滅が著しく年代決定が困難であった。傾向としては黒色土器A類碗の破片など9世紀後半~10世紀頃の遺物を検出したものと、13世紀後半から末葉の遺物を検出したものに分けられるが、若干時期の遡る遺物を検出するものも検出されている。

第2遺構面(第18図)

平均標高41m付近の第8層上面を検出面として、落ち込み、溝1条、土壤4基、掘立柱建物1棟、柱穴44個などが検出されている。

落ち込み

調査区中央部から南に向けて緩やかに落ち込んでおり、調査区外に延びている。東西17m以上、南北9.5m以上、深さ15~50cmを測る。落ち込み内は5層に分かれ、上層の暗褐色砂質土層より6C後半の須恵器の膜(第20図-25・26)が検出されている。明確な堀方をもたず、古墳の周溝などの可能性を裏付ける明確な遺物を検出していないことから、自然地形であると思われる。

溝(SD-01)

調査区西部に位置し、北北西から南南東に向けて直線的に延びる。溝の北端は調査区外に延びるために拡張調査の対象となつたが、更に調査区対象地に延びることが判明した。南部では削平のために一度途切れた後、調査区外につづいている。

検出面での幅は50cm~90cm、深さ3~32cmを測り、断面形態は逆台形を呈する。溝底の南北での高低差は約30cmであり、北から南に向かう流路である。溝内は2層に分かれ、上層の淡茶褐色土層より6C後半の破碎された須恵器甕(第19図及び図版21-D)が遺構検出面とほぼ変わらない高さで検出されており、下層の暗茶褐色粘質土層からも同時期の土師器・須恵器の破片が出土している。

掘立柱建物

調査区北東部に位置する。規模は東西1間(2.6m)×南北1間(2.8m)を測り、東側調査区外に延びる可能性もある。南北方向はN-5°Eにとる。柱穴の堀方は直径25~35cmを測り、柱痕は識別できなかった。遺物は南東隅の柱穴より古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が出土し、遺構面直上で完形に近い土師器の長胴甕(図版21-E)が検出されている。

土壤-7

落ち込みの北側に位置する不定形の土壤で、長さ4.5m、幅2.1m、深さ約90cmを測り、壙底は平坦である。遺物は検出されなかった。

土壤-8

落ち込みの西側に位置する不定形の土壤で、東端を切られている。長さ3.7m、幅1.4m、深さ3cm前後を測り、壙底は平坦である。遺物は検出されなかった。

土壤-9

調査区南西部に位置し、西端は調査区外に延びる。長さ3.2m以上、幅1.7m、深さ40cm前後を測る。形態は隅丸長方形でやや平坦な壙底を呈する。遺物は検出されなかった。

土壤-10

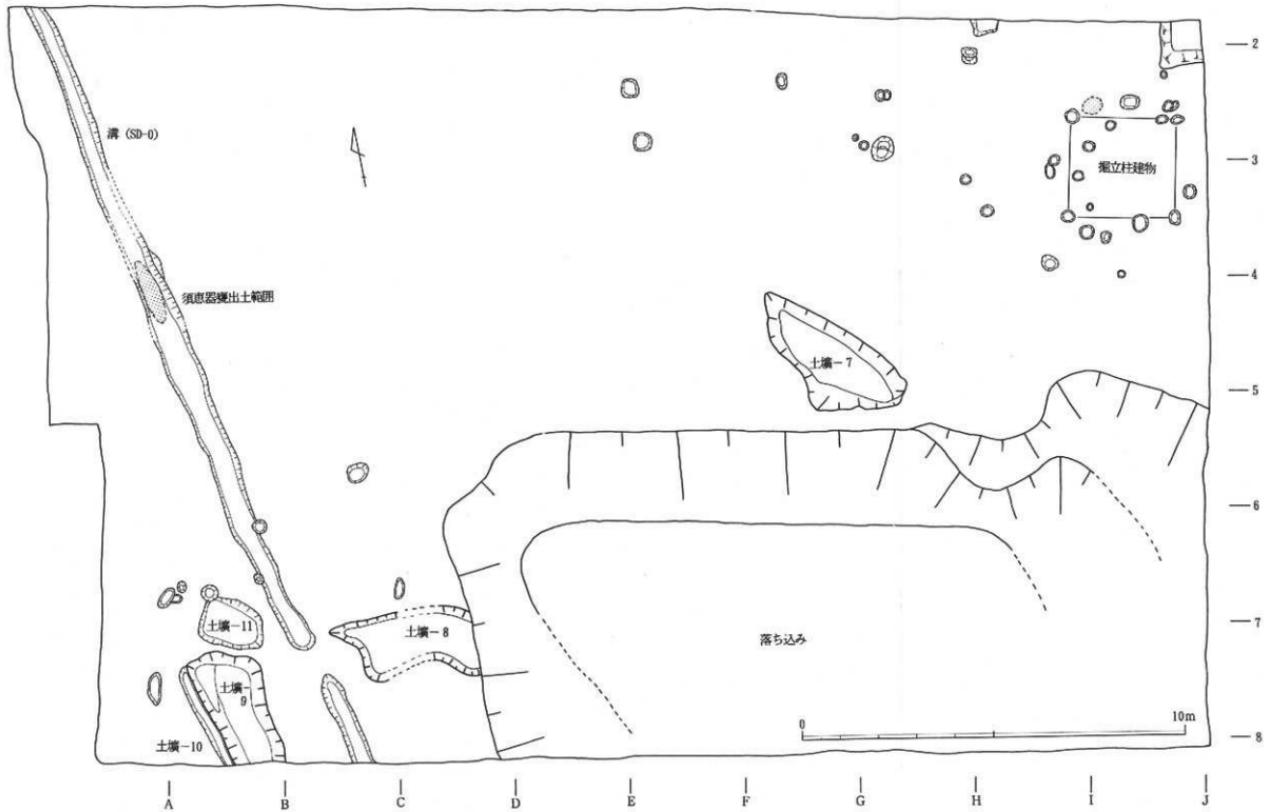
土壤-9の西側にあり一部が重複して切られており、南端は調査区外に延びている。長さ2.5m以上、幅25cm以上、深さ26cm前後を測る。遺物は検出されなかった。

土壤-11

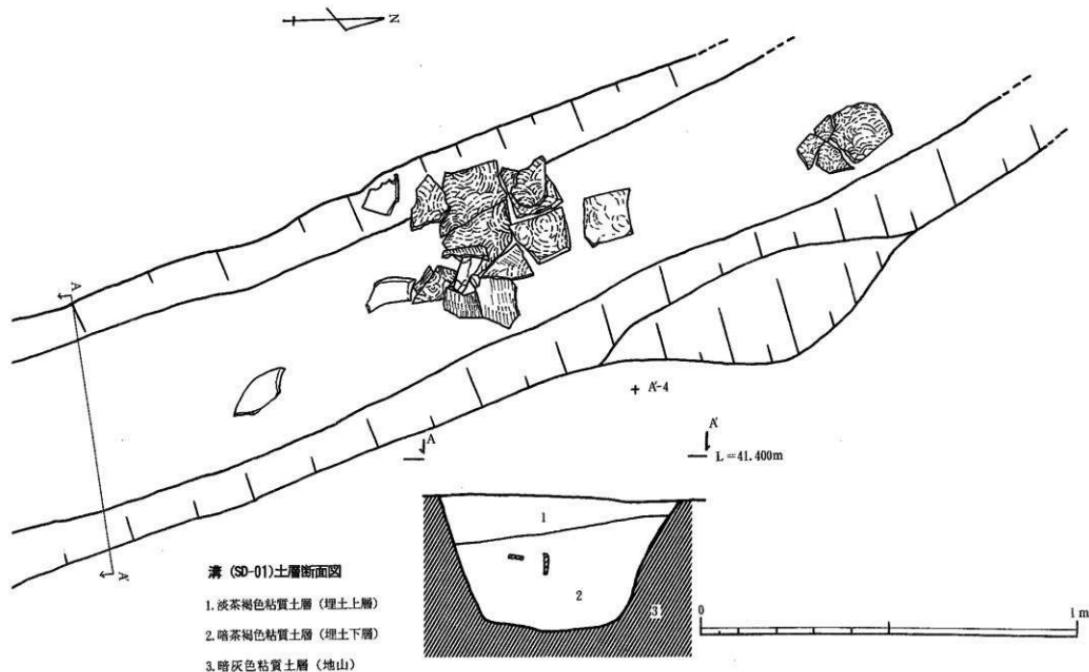
土壤-9の北に位置し、長さ1.7m以上、幅1.2cm以上、深さ10cm前後を測り、形態は隅円方形に平坦な溝底を呈する。遺物は検出されなかった。

柱穴

第2造構面で検出した44個の柱穴のうち4個が掘立柱建物の柱穴を構成するが、他の柱穴に関しても、調査区北東部に位置するものを中心に何らかの建物や構造物を構成する柱穴と考えられる。これらの柱穴の形態は円形もしくは梢円形を呈しており、直径15~70cm、深さ3~40cmを測る。遺物は半分近くの柱穴から、古墳時代後期頃の土師器・須恵器の破片が検出されているが、細片あるいは摩滅を受けたもののが多かった。 (中東)



第18図 宿久庄遺跡 第2遺構面平面図



第19図 第2遺構面・清 (SD-01) 土器出土状況図及び同断面図

出土遺物

出土遺物の大半が包含層からの出土で、第2遺構面の落ち込みの遺物を除けば遺構に伴う遺物は少ない。特に第1遺構面の掘立柱建物に伴う遺物は細片が多く、溝や井戸などの比較的多くの遺物を出土する遺構が検出されなかったことにもよる。また、整理作業に時間的制約を受けたため図化することができた資料は限られている。そのため代表的な遺物のみ取りあげることとし、図化しなかったものも必要に応じて図版の方で取りあげた。

第1遺構面出土土器（第20図-1～9）

(1)～(3)は瓦器碗である。

全体的に器高が低く、外面の口縁部付近は強いヨコナデ調整を施して明瞭な段を有する。また、体部下半は指頭圧成形の凹凸が目立つ。体部内面及び見込みのヘラミガキは渦巻状と粗い平行線状を呈するもの(1)などがあるが、(2)及び(3)は内面は摩滅のため調整は不明である。和泉型の瓦器碗で13世紀後半ぐらいのものと考えたい。(1)・(3)は掘立柱建物-1、(2)は第5層(包含層)から出土。

(4)は、土師器皿である。

体部にヨコナデを施し、底部に指頭圧成形の凹凸が目立つ。色調は淡赤褐色を呈し、胎土精緻である。口径は7.9cmを測る小皿である。掘立柱建物-2から出土。

(5)は東播系須恵器捏鉢である。

口縁部端部をやや拡張し面を持つ。体部に内外面ともヨコナデを施す。第5層(包含層)から出土。

(6)～(7)は、白磁碗である。

(6)は、玉縁の口縁を有する白磁IV類の破片である。(7)は、口縁端の釉を搔き落とす、いわゆる口禿の白磁IX類の破片である。⁽¹⁾(6)～(7)とも第5層(包含層)から出土している。

(8)は、黒色土器A類碗である。

口縁部外面はヨコナデを施し、内面はヘラミガキを施している。また、口縁端部内面直下に一条の沈線をめぐらし、器壁は薄い。黒色化している範囲は、内面と外面の口縁部付近におよんでいる。第5層(包含層)から出土。

第2遺構面出土土器（第20図-10～26）

(10)～(13)は須恵器の坏蓋である。

いずれも天井部回転ヘラケズリ、体側部から口縁部にわたってはヨコナデ成形が行われている。特徴的なものとしては、つまみが付く有蓋高坏の蓋(10)がある。天井部にカキ目調整を施すもの、の体側部上半部に刻み目を施すもの(11)がある。

(8)～(13)はいづれも第6層(包含層)から出土している。時期は6世紀後半から末頃と考えられる。

(14)～(23)は須恵器の坏身である。

(14)～(20)は形態的に大きな差がなく、いずれも比較的大きな器径の体部に内傾するたちあがりを待つ。また、すべて底部のみ回転ヘラケズリを施し、他はヨコナデ調整をおこなう。これらは6世紀後半から末頃のものであろう。(21)は少し時期の下がる7世紀初頭頃の坏身である。(22)～(23)は内傾するたちあがりを待ち、端部は凹面を呈する。5世紀末から6世紀初頭の坏身である。いずれも第6層(包含層)から出土している。

(24)は、須恵器の短頸壺である。

体部上半はヨコナデ仕上げ、体部下半はヘラケズリをほどこす。体部最大腹径部付近に焼成後の穿孔1ヶ所がある。第6層(包含層)から出土している。時期は6世紀後半から末頃と考えられる。

(25)～(26)は、須恵器の罐である。

ともに口縁部は段をつけて屈曲して外反する。頸部を細く作り体部は偏球形を呈する。また、(25)は肩部に幅広い1条の凹線をめぐらす。いづれも落ち込みから出土。時期は6世紀後半から末頃と考えられる。

第2造構面から出土している須恵器のうち時期の遡るものも出土しているが大半が田辺編年のTK43型式～TK217型式に位置付けることができる。

(演野)

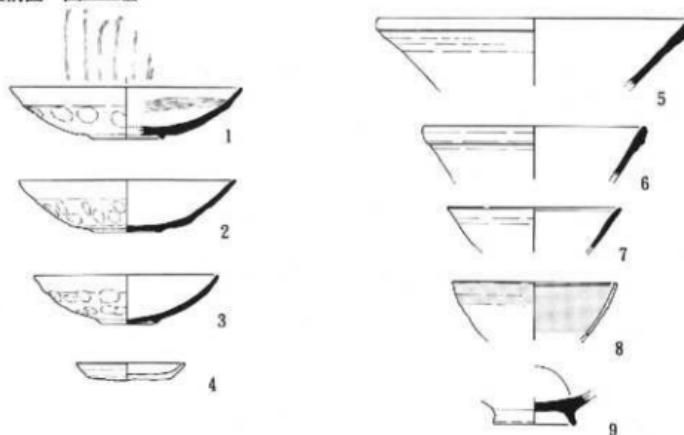
<註1> 横田 賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」

九州歴史資料館『九州歴史資料館研究論集4』1978年

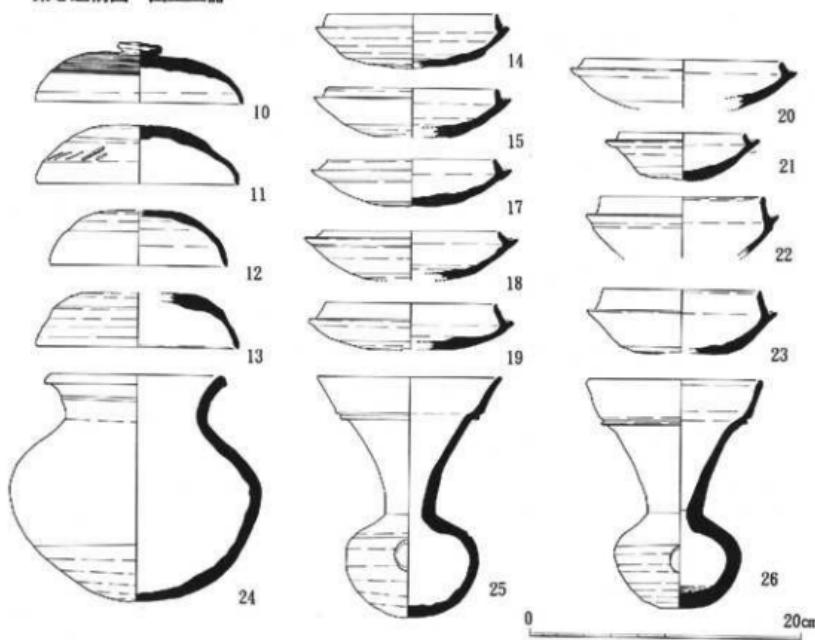
<註2> 田辺 昭三「陶邑古窯址群I」平安学園考古クラブ 1966年

田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981年

第1遺構面 出土土器



第2遺構面 出土土器



第20図 宿久庄遺跡出土土器実測図

第3節 ま と め

茨木市内において中世集落の構成を知りえる程度の規模を発掘調査した例はいまだ少ない。東奈良遺跡や郡遺跡において掘立柱建物跡・井戸・溝・水田などの遺構、そして瓦器などの遺物を検出した例はあるが、大半が掘立柱建物跡や井戸が単独で検出され、瓦器碗などの遺物が出土していることが多い。しかし、最近の大規模開発は、従来のトレンチ調査やグリット調査では検出不可能であった中世集落が、面的に調査検出されるようになつた。

今回報告する宿久庄遺跡の第1遺構面で検出した掘立柱建物群は、大阪府教育委員会が最近調査した玉櫛遺跡と同様に、市内における中世集落構成の一端を示す資料を提供することとなつた。⁽¹⁾

また、今回検出した第1遺構面の掘立柱建物群をはじめ、第2遺構面の古墳時代後期の落ち込みや掘立柱建物跡・溝などは、従来まで遺跡の様相が不明であった宿久庄遺跡についても遺跡の変遷を示す重要な資料を提供することとなつた。⁽²⁾

以下、成果と問題点を箇条書にし、問題点を提示してまとめとしたい。

(1) 今回の調査で、第1遺構面で検出した掘立柱建物6棟と棚列3列のうち、9世紀後半から10世紀頃のものが2棟と1列、そして、13世紀後半から末葉ものが4棟と2列を確認した。しかし大半の柱穴からは遺物のはほとんどが細片で出土しており掘立柱建物の時期決定が難しく、時期がある程度判明できそうな土器を出土している柱穴がある建物か、その建物を切り合い関係で示している建物と棚列に限った。このため、第1遺構面で検出した6棟以外にも掘立柱建物が存在した可能性は高い。

そして、図化した大半の土器が包含層からの出土であるが、包含層出土の土器を検討してみると13世紀後半から末葉の建物群の他に12世紀の中葉から後半ぐらいまで遡りそうな掘立柱建物が存在している可能性が高いと思われる。また、9世紀後半から10世紀ぐらいの掘立柱建物群からは黒色土器A類は出土しているが、今回の調査地では包含層および遺構内からは黒色土器B類は全く出土していないのが特徴である。

(2) 第1遺構面で検出した13世紀後半から末葉の掘立柱建物群含め集落を構成要素である井戸・水田・区画溝や生活溝そして墓などは全く検出されなかった。このことは、調査対象とした部分が集落の中心部に当たっており、付属施設の井戸や水田などは調査地周辺に存在する可能性が高い。

玉櫛遺跡では水田を中心に掘立柱建物や溝が検出されており、また、近隣の高槻市の宮田遺跡や上田部遺跡そして箕面市の如意谷遺跡などでは掘立柱建物と井戸・区画溝や生活溝・墓などがセットになった中世集落の構成の一端を示す遺構が検出されているため、今後の調査地付近での調査で付属施設等が検出されることを期待したい。

(3) 第2遺構面では古墳時代後期の落ち込みや掘立柱建物跡・溝などが検出されたが、

検出した遺構から、当該地は古墳時代後期において集落の縁辺部にあたっていたと思われる。特に、落ち込みから出土した完形品の縫や溝（SD-01）において検出した故意に破碎した須恵器の大甕の出土状況（第19図）、そして焼成後穿孔した完形品の短頸壺などから、落ち込み付近で祭祀をおこなっていた可能性が高い。そして、古墳時代後期の掘立柱建物跡は1棟のみで遺構もまばらであることから、9世紀後半ぐらいまで集落の形成はおこなわれなかつたようである。その後、落ち込みの大半が埋没して影響が無くなつた9世紀後半以降集落が形成され、時折り断絶を挟みながら集落の規模を拡大していったことが伺い知れる。

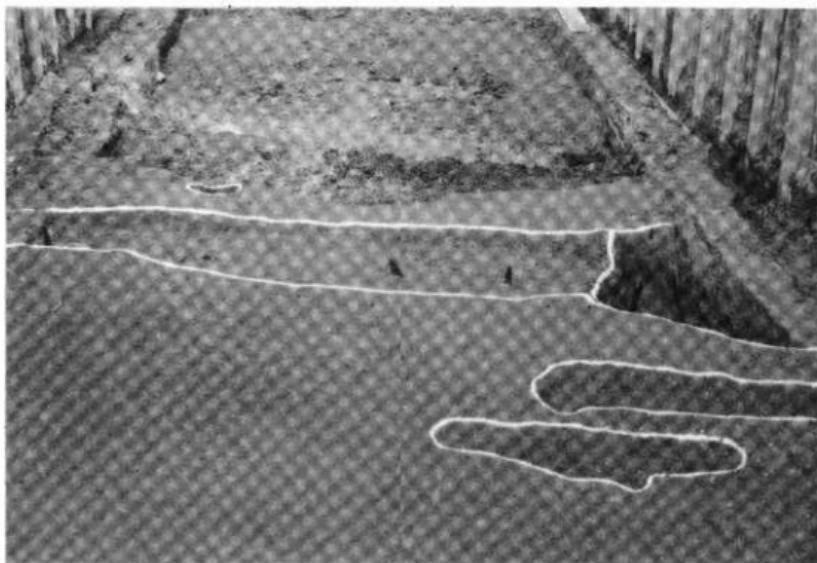
上記のように、今回の発掘調査で今まで遺跡の様相があまり判明していなかった宿久庄遺跡であるが、いくつかの成果を得ることができた。今後も律令時代の嶋下郡宿久郷、中世荘園の宿久庄、そして中世末期の宿久城などの各時代の宿久庄遺跡の様相解明の手掛かりをつかみたいと考えている。

（濱野）

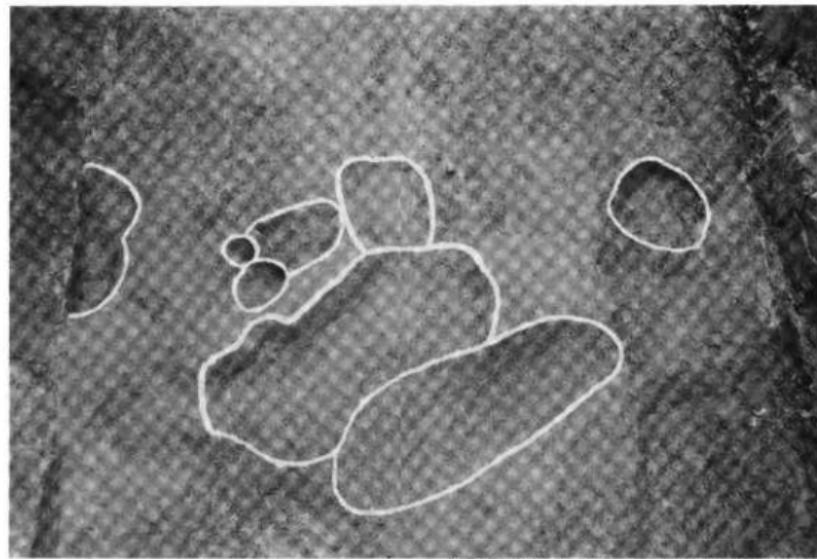
<註1> 平成2年度の（仮称）茨木市立中央図書館（畠田地区）建設に伴う発掘調査において中世の井戸が1基検出されている。この井戸からは和泉型瓦器碗・瓦器皿・土師器皿・土師器鍋・束縛系須恵器捏鉢・十瓶山窯須恵器甕などが一括で出土している。高槻市埋蔵文化センターの横本 久和氏によれば、この井戸から出土した和泉型瓦器碗は12世紀中頃の瓦器碗で南河内における尾上編年のII-2期に比定でき、他の遺物も年代的にあまり齟齬をきたさないことを御教示いただいた。

<註2> 大阪府教育委員会『玉串遺跡現地説明会資料』1991年

図 版



第1遺構面 (SD-01~03) 検出状況 (西から)

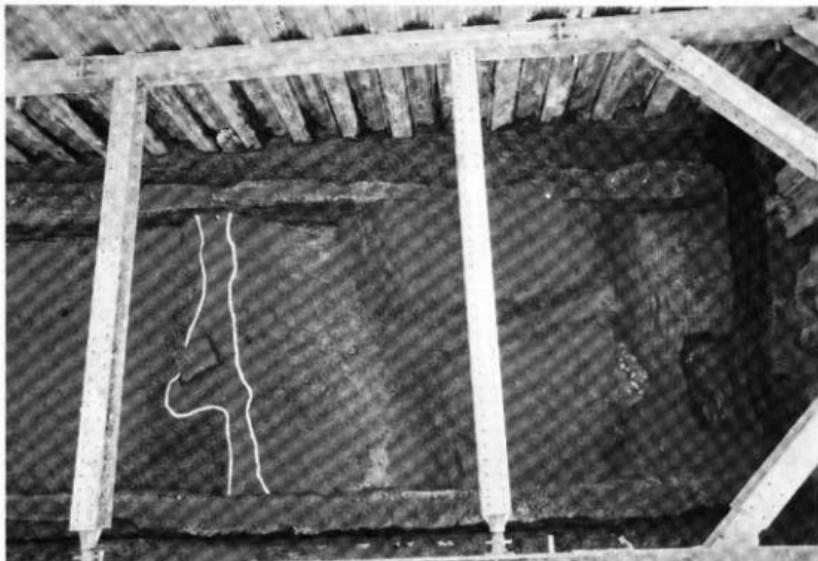


第2遺構面、土壤群検出状況 (東から)

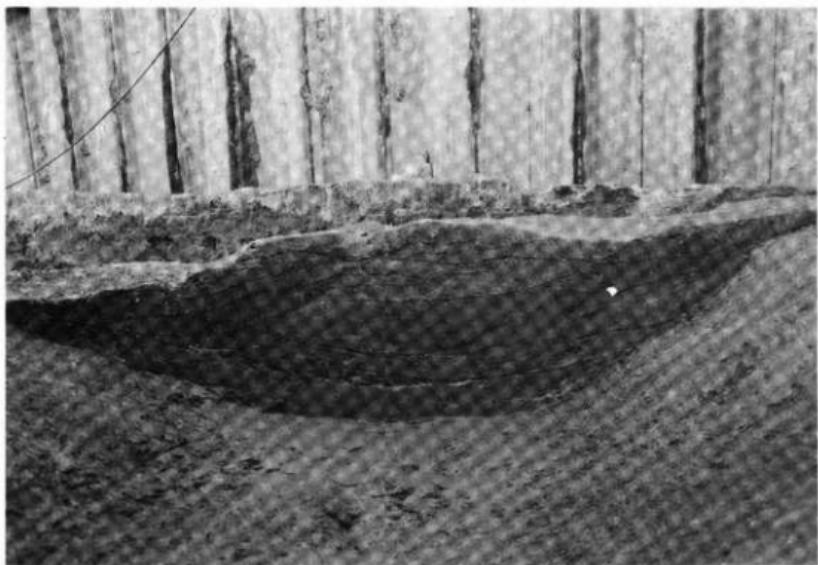
図

版 中河原遺跡 (NG・90-1)

2



第3 遺構面方形周溝状遺構1・2 (北から)



方形周溝状遺構-1・2 (SD-07) セクション (北から)



方形周溝墓状遺構-1（南から）

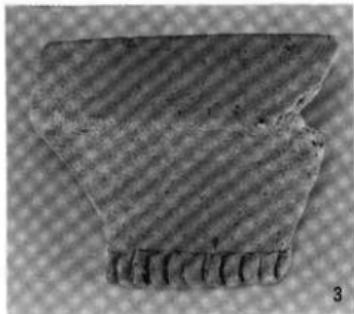


方形周溝墓状遺構-2（南から）

図
版

中河原遺跡 (NG・90-1)

4



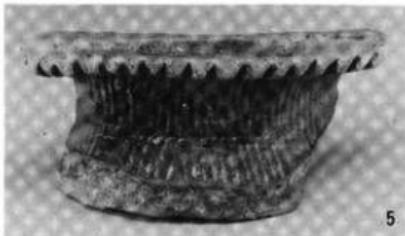
3



4



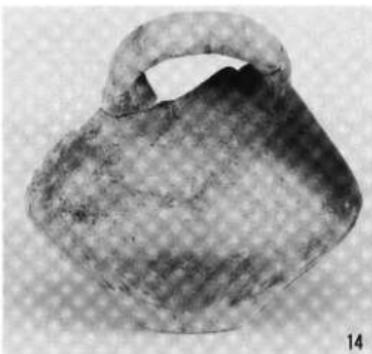
19



5



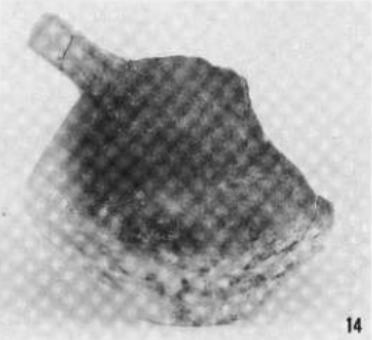
16



14

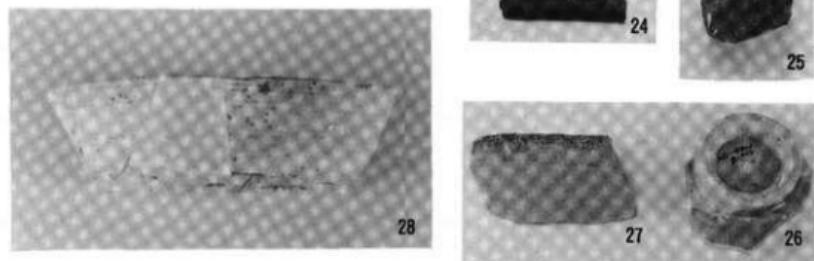
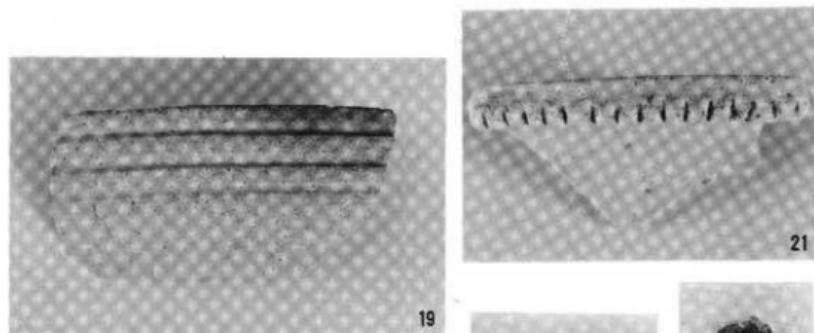
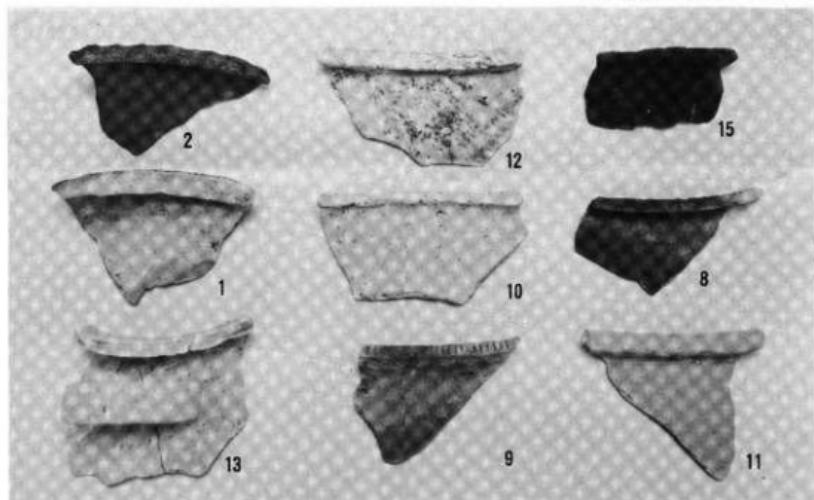


18



14

中河原遺跡 (NG・90-1) 出土土器 (1)



中河原遺跡 (NG・90-1) 出土土器 (2)

東奈良遺跡 (HN H-4-E・F 地区)

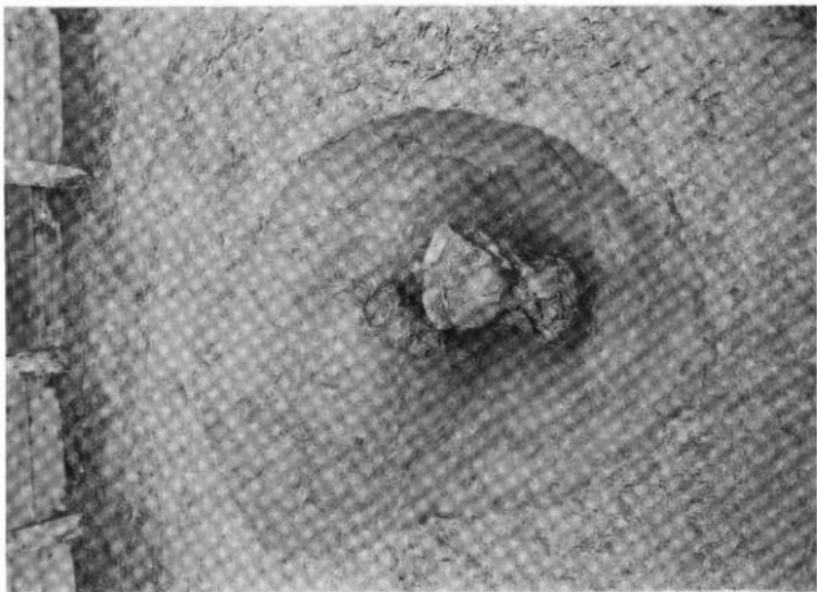


調査区全景（北から）

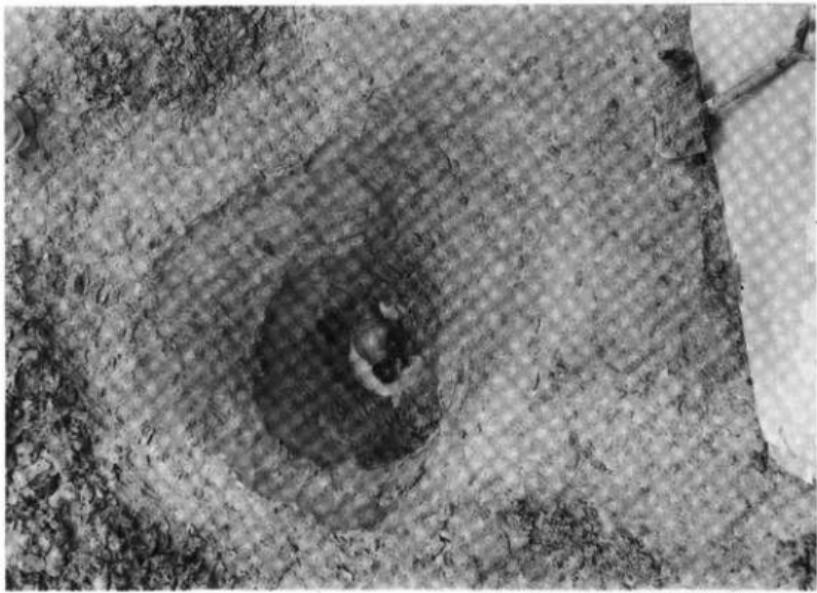


大溝中央セクション（南東から）

東奈良遺跡 (HN-4-E-F 地区)



土壤-1上層土器検出状況（北から）



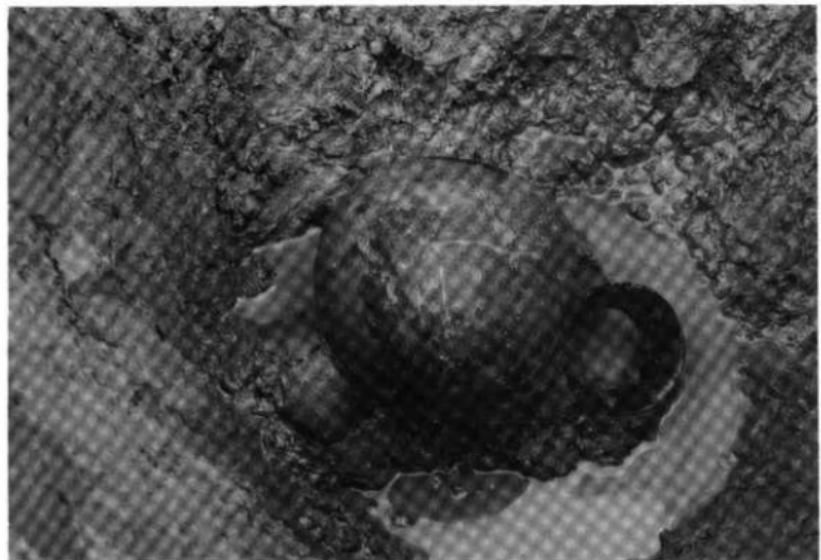
土壤-1下層土器検出状況（北から）

東奈良遺跡 (HN H-4-E・F地区)

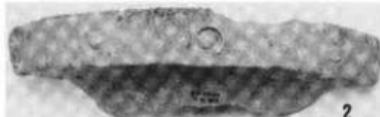
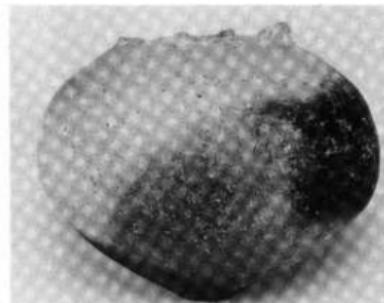
8



土塁-1上層土器検出状況（東から）



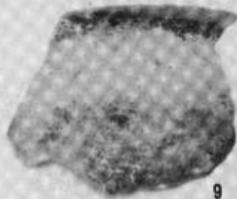
土塁-1下層土器検出状況（東から）



2



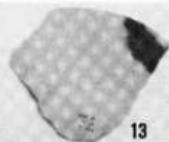
1



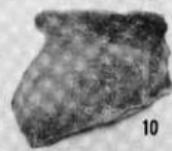
9



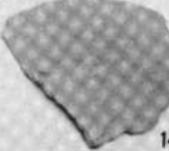
8



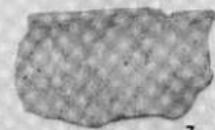
13



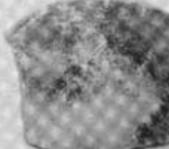
10



14



7



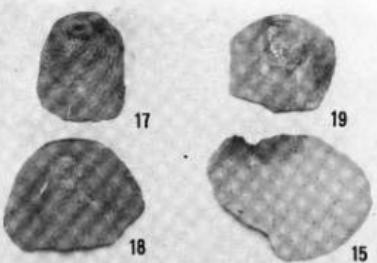
12

東奈良遺跡 (HN I-4-K)

10



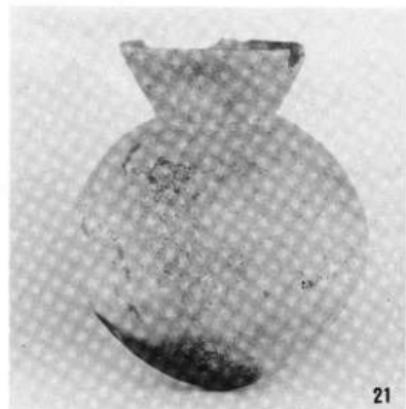
11



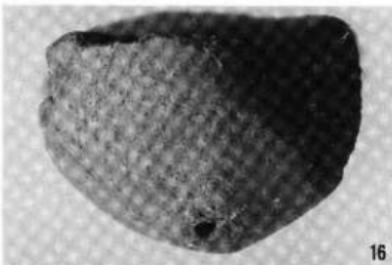
19

15

16



21



16



22

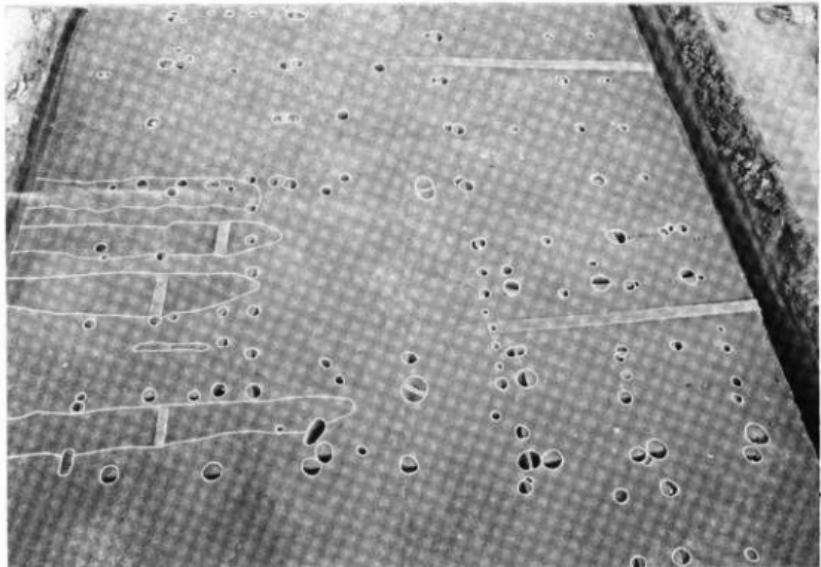


20

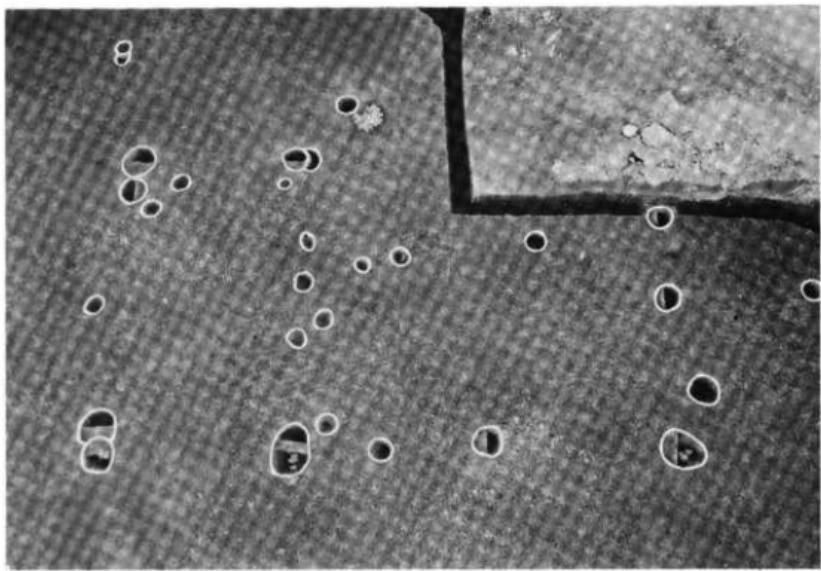


28

東奈良遺跡 (HN H-4-E・F 地区) 出土土器 (2)



第1遺構面全景（西から）

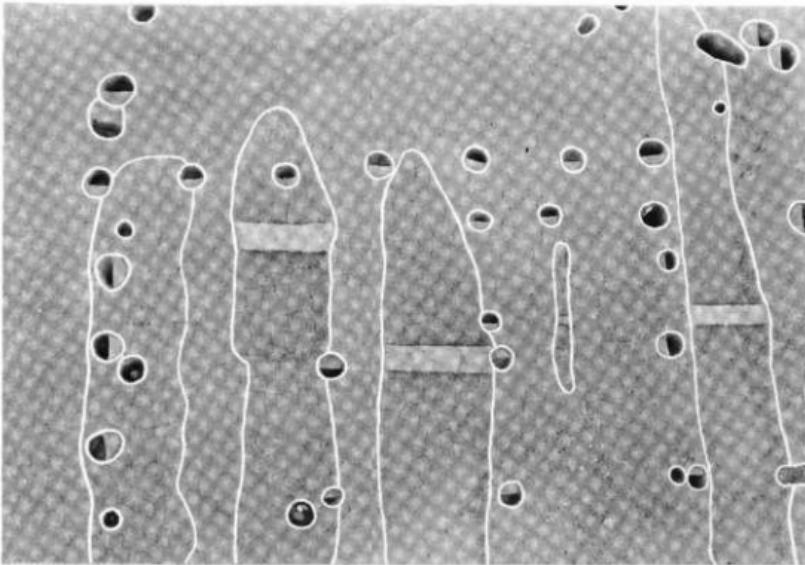


掘立柱建物-6（南から）

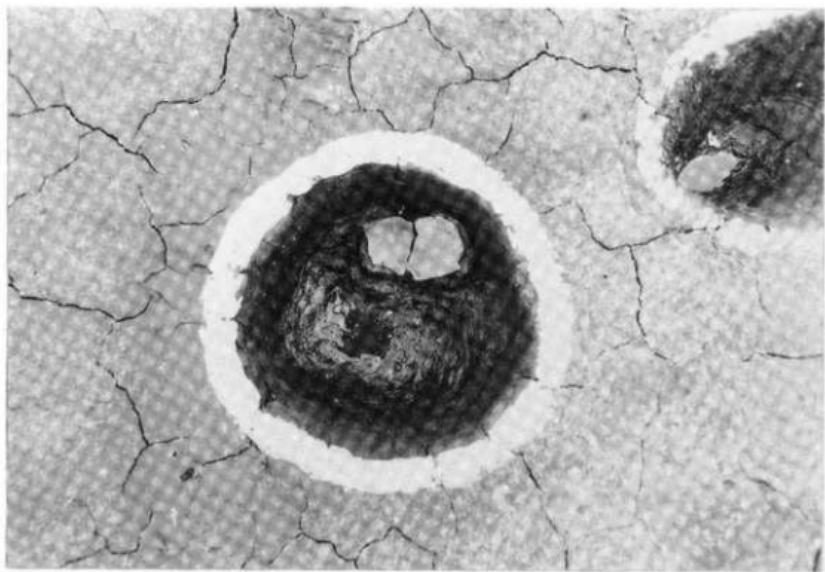
図
版

宿久庄遺跡 (SH・91-1)

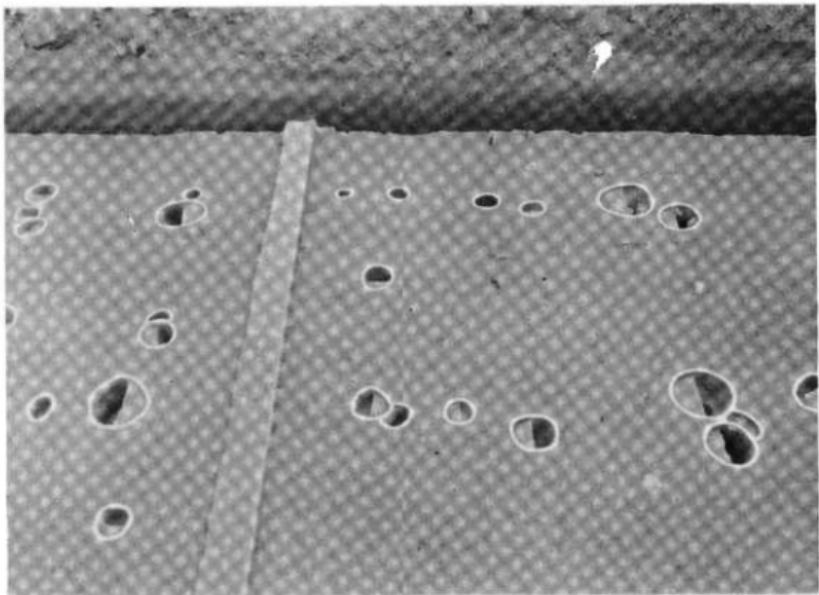
12



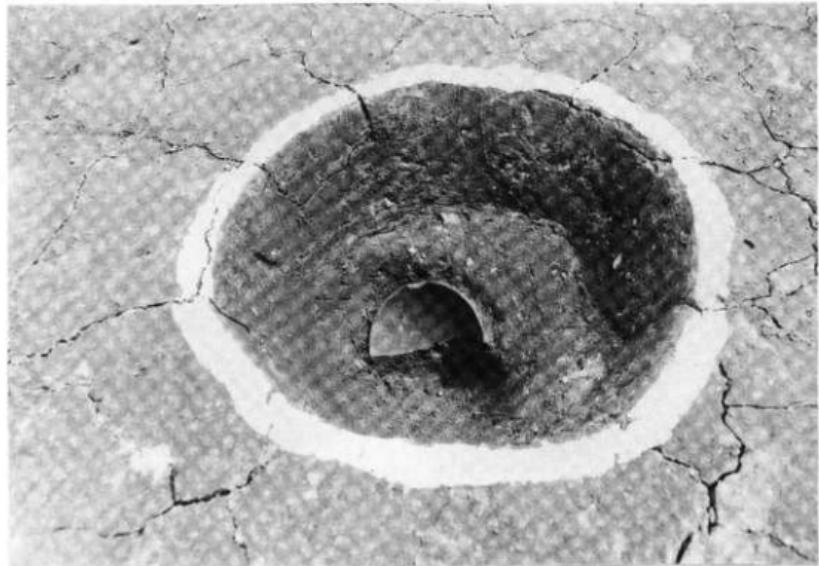
掘立柱建物-4 (南から)



掘立柱建物-4・柱穴 (SP-14・SP-17) 土器出土状況 (北から)

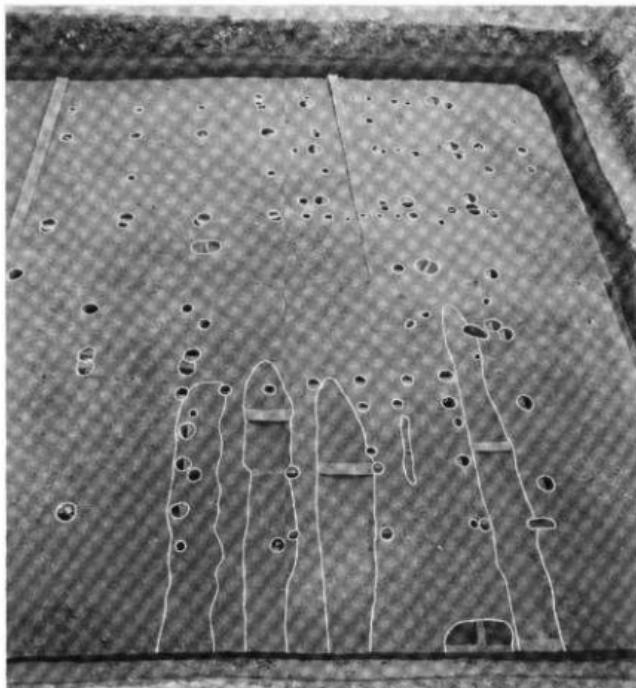


掘立柱建物-3 (北から)

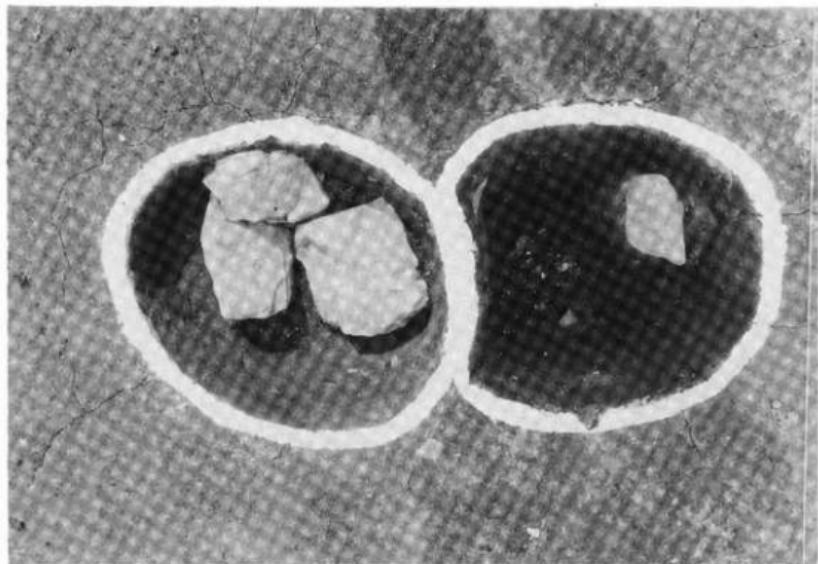


掘立柱建物-3・柱穴 (SP-123) 瓦器塊出土状況 (南から)

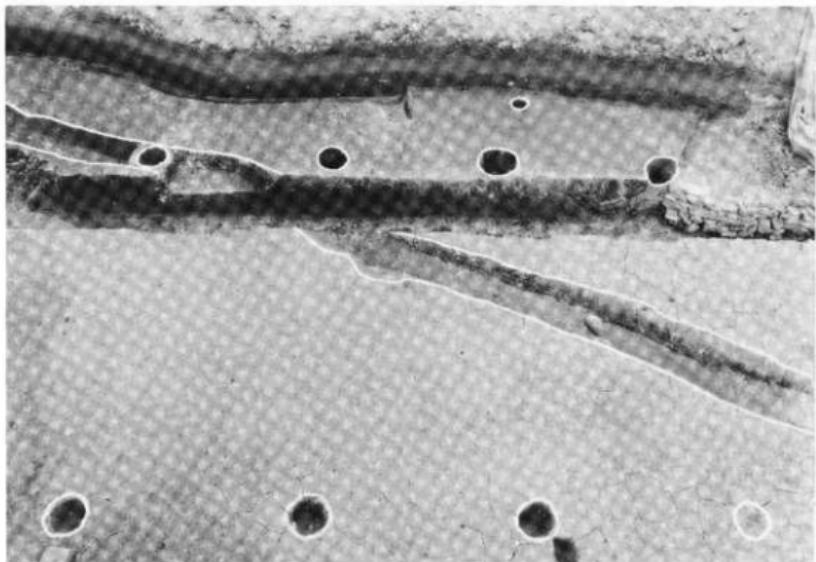
宿久庄遺跡 (SH・91-1)



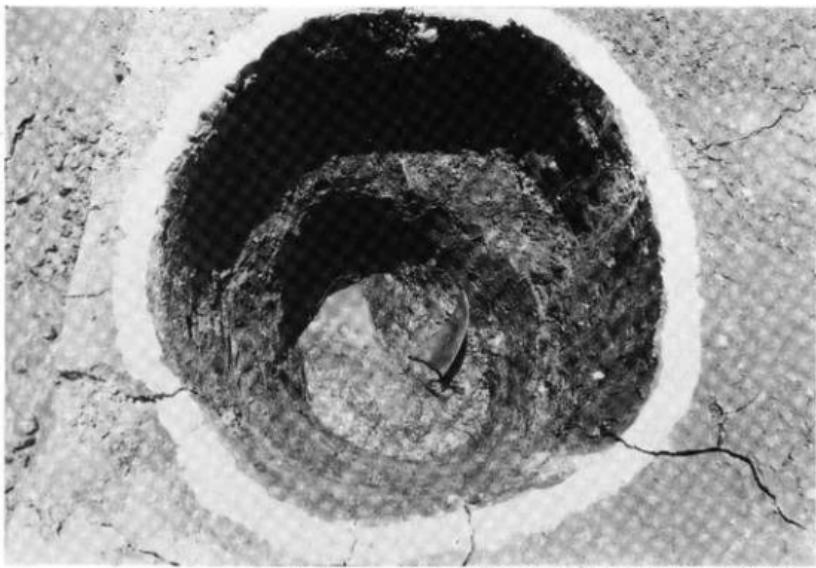
掘立柱建物-4、柵列-1、掘立柱建物-5、柵列-2全景（北から）



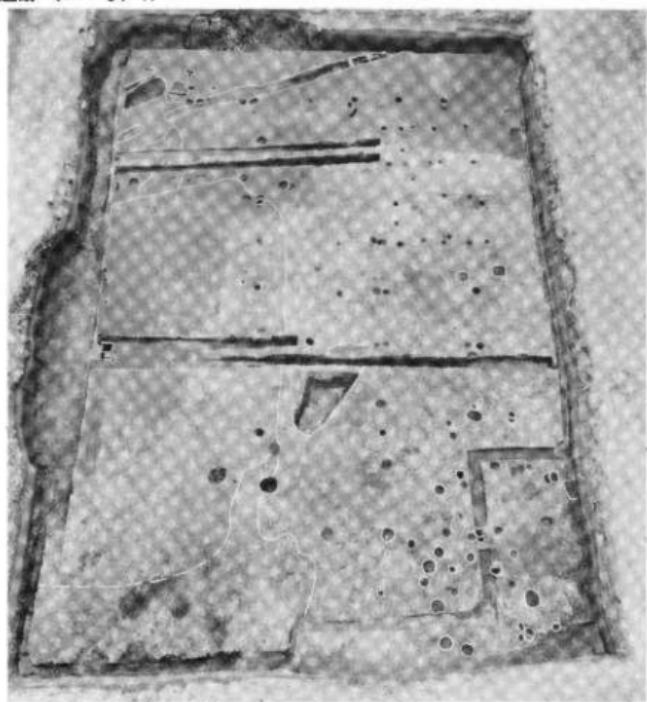
掘立柱建物-5、柵列-2、柱穴内 (SP-46, SP-42) 根石検出状況 (東から)



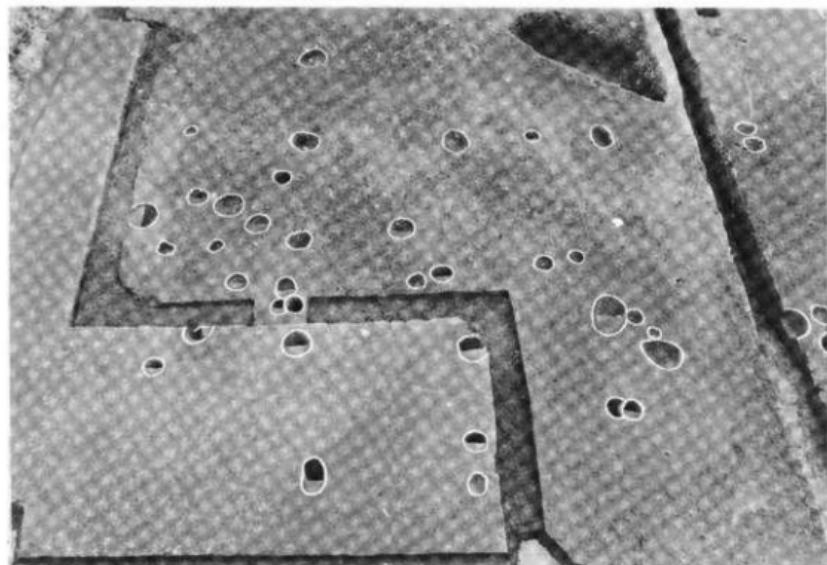
掘立柱建物-1 (東から)



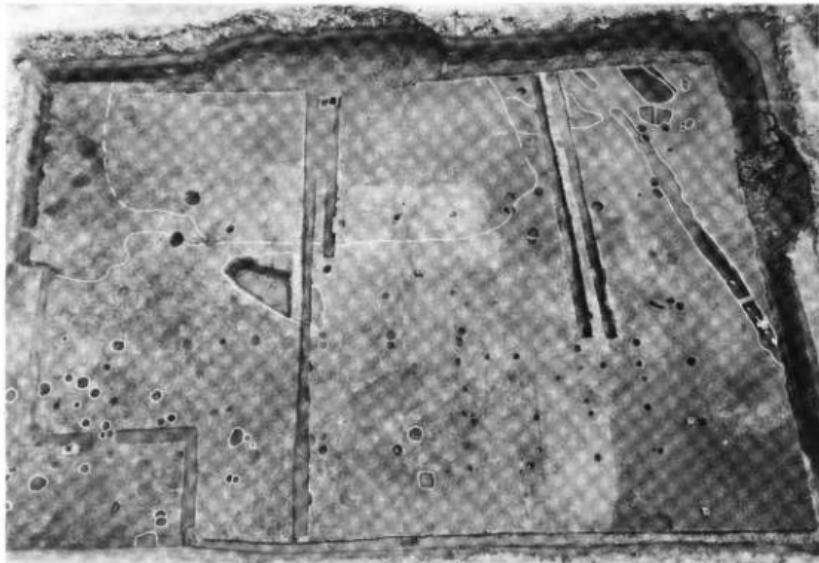
掘立柱建物-1柱穴 (SP-190) 瓦器塊出土状況 (南から)



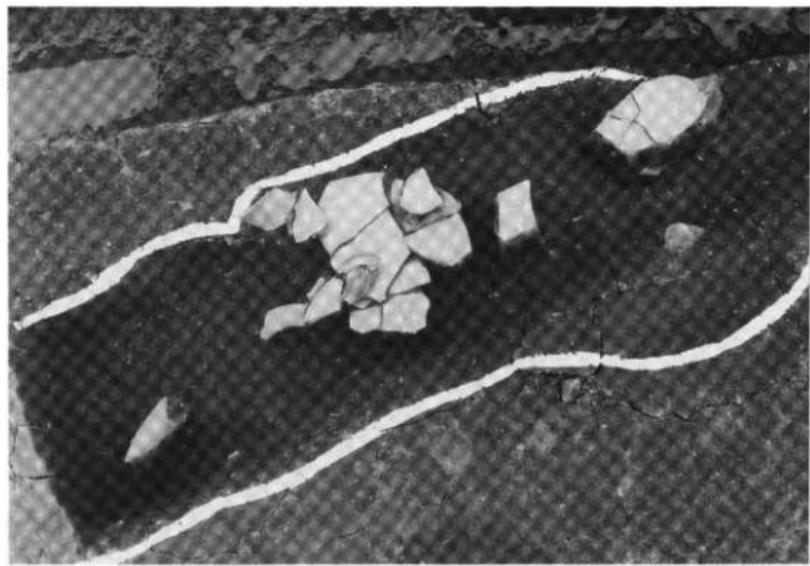
第2遺構面全景（東から）



第2遺構面・掘立柱建物



第2遺構面全景（北から）



溝 (SD-01) 須恵器壺出土状況 (南東から)

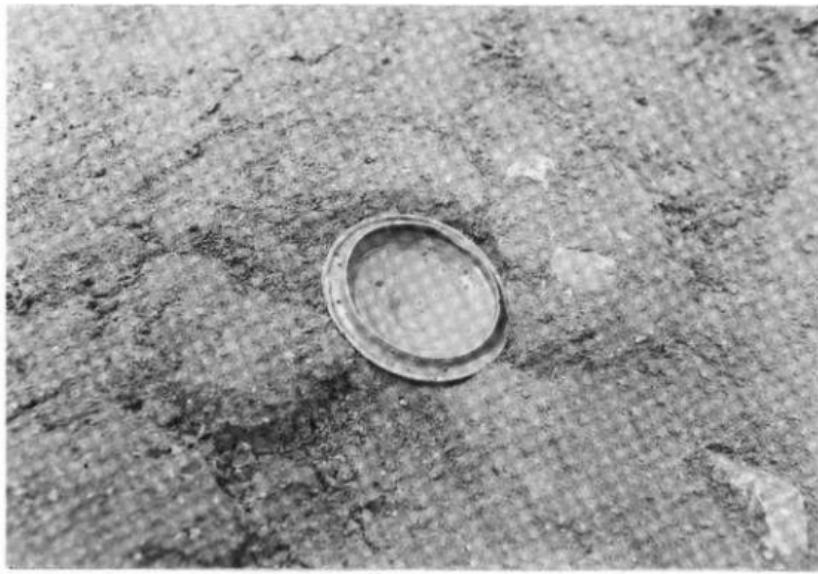
図

版 宿久庄遺跡 (SH・91-1)

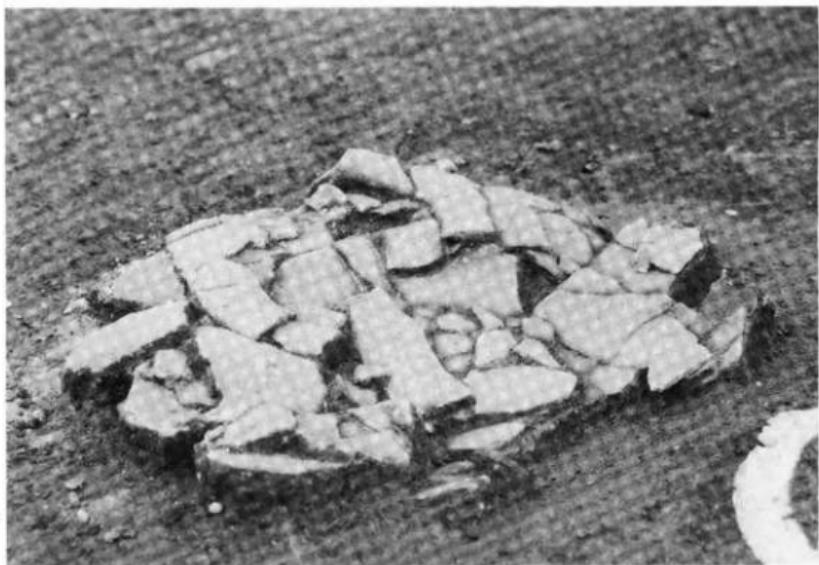
18



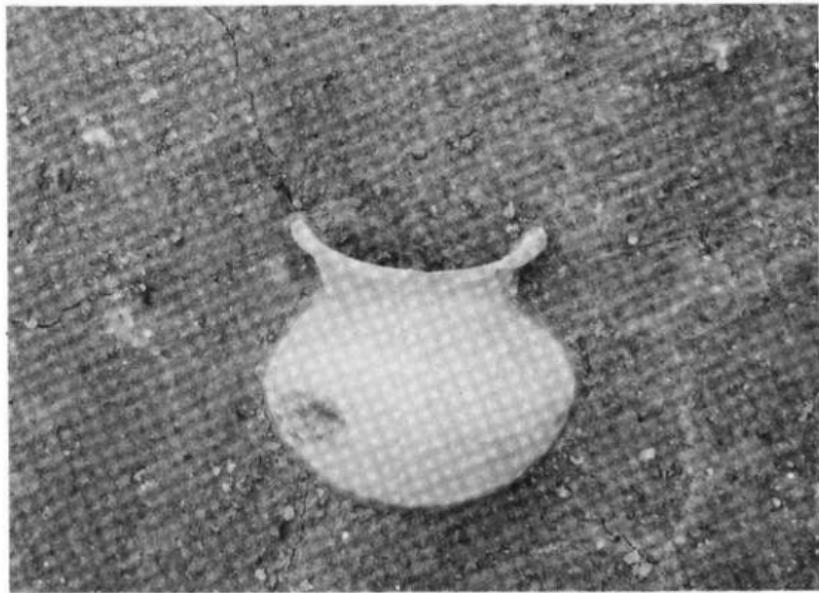
第2遺構面廻出土状況（南から）



第2遺構面 壊身出土状況（南から）



第2遺構面掘立柱建物出土土師器壺状況（南から）



第2遺構面短頸壺出土状況（南東から）

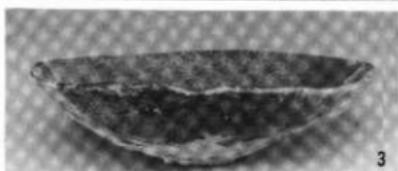


宿久庄遺跡 (SH・91-1)

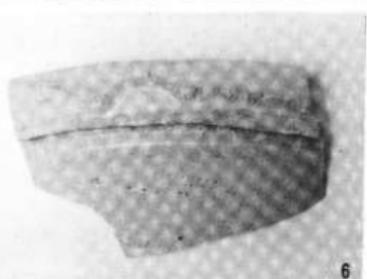
20



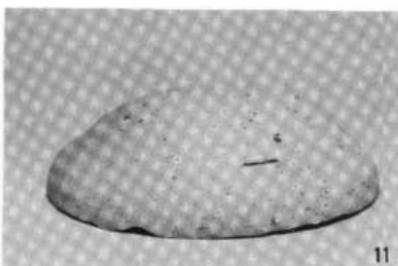
2



3



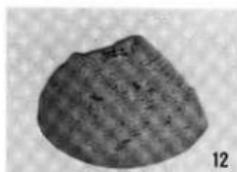
6



11



21



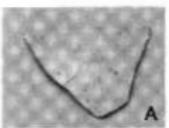
12



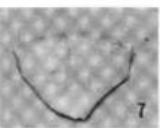
5



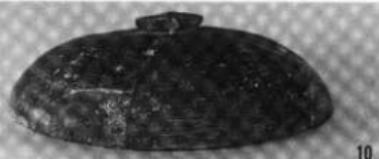
8



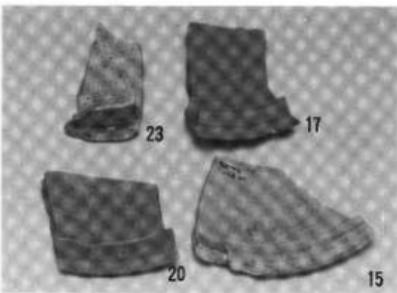
A



7



10

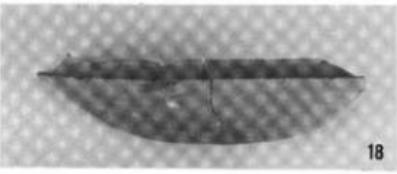


23

17

20

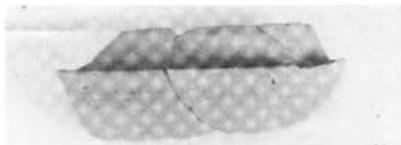
15



18

A. 挖立柱建物 - 4 直上層出土白磁片

宿久庄遺跡 (SH・91-1) 出土土器 (1)



22



24



25



B



26



C



E

B. 挖立柱建物-1. 土師皿集積遺構出土土師皿

C. 挖立柱建物-1. 土師皿集積遺構出土瓦器皿

D. 第2遺構面. 溝(SD-01)出土須恵器甕

E. 第2遺構面. 挖立柱建物出土土師器甕



D

平成 3 年度 発掘調査概報

発行日 平成 4 年 3 月 31 日
発 行 茨木市教育委員会
印刷所 赤井印刷株式会社